# 赤眼の狼

如月 晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤眼の狼

【Ｎコード】
Ｎ６２８０Ｘ

【作者名】
如月　晃

【あらすじ】
ヘクセと呼称される吸血鬼。
その有り得ない存在を狩る為に結成された自衛隊少数精鋭の特殊部隊「ＨＡＷＫ」。
親がいなく、幼い時から自衛隊の訓練を受けた「赤眼の狼」と称される少年「直江幸成」と「ＨＡＷＫ」隊員はあるヘクセを追って「華景市」に潜入する。

幸成が潜入を命じられた場所は高校であった……

幸成を取り巻く隊員や高校生達による青春学園ダークファンタジー

# 序章：開幕

月夜の中の街。
街灯は無い。
その闇を照らすは月明かり。
雲一つ無い満月が照らす夜闇。
満月は青白く輝き、美しい。
昼とは違う澄んだ空気。
澄んだ空気は夜という物を形作る一つの事象であった。
その空気が不意に掻き乱されて風となる。
地面を叩く靴の渇いた音とそれに連なる呼吸の乱れた音が「静かな夜」という体系を崩していく。
その夜の中を転びそうになりながら脱兎の如く走っていく若い女性がいた。
その後ろからは不規則で粘着室な吐息が聞こえてくる。
獲物を追い詰める猟犬のようにつかず離れずの距離で嬲るように迫るのは男だ。
若い女性の後ろには中年で肉付きのいい中年男性が迫って来ていた。
中年の男は太っている割には足が速く、女性に張り付く様は無気味だ。
女性は助けを求めて悲鳴をあげるが、聞こえているのか聞こえていないのか、誰も家の中から出て来ない。
日本人は事件に遭遇しないように極力厄介事から遠ざかろうとする。
他人の不幸よりも自らの身の安全だけを考えて……
月夜の光で影が伸び、既に女性の影は男に踏まれていた。
既に捕まったも同然の状態で、いつでも捕まえられるのだと物語っている。
女性は月明かりの中を逃れるように大きな廃工場の中に飛び込んだ。
光よりも闇を……

闇を求めた女性は鉄の扉を慌てて開け、閂錠(かんぬき)を掛ける。
女性は広い空間の中、後退りをすると扉を凝視した。
数秒の沈黙の後に体をぶつける音が扉の向こうから聞こえてくる。
女性は尻餅を付くと、壁まで這う。
「誰か！誰か助けてぇ！！」
その悲鳴は虚しく廃工場の広い空間に谺(こだま)した。
元は何かの生産工場であっただろうが、今はそのような機械は無く、ひどく殺風景だ。
鉄の扉が軋む音と凄まじい轟音。
「もうすぐ僕の血肉になるんだよ？もっと喜んでよ、デュフフフ」
男の下劣な声が轟音に混じって聞こえてくる。
声音は下品で無気味、混じる息切れが澄んだ空気に絡み付く。
「誰かぁ！！」
女性の悲鳴が響いた瞬間、扉が勢いよく開き、月明かりに照らされながら男が現れた。
男は口元を涎で濡らし、口元が異様に光っていた。
舌なめずりをする度に涎が口元を濡らして、月明かりで糸が引いているのが良く見える。
男は女性に歩み寄ると膝に手を当てて、先程擦りむいたであろう傷から流れ出た血を舐め取った。
「美味い血だぁ……デュフフフフフ」
男は下卑た笑いを浮かべて女性を抱き抱え、その鋭い歯を首筋に突き立てようと口を開いた……
「イヤァアアッ！！誰かぁ！助けてぇ！！」
女性の絶叫が轟いたその時、男の腕から血が飛び散った。
男は思わず女性を取り落とすと、辺りを見渡し、怒鳴り散らす。
「誰だ！！何者だ！？」
「ヘクセ、ブラッド・ラスター。貴様を排除する」
廃工場の天窓から一人の少年が飛び降りてきた。
両手には先程、男の腕を撃ったであろう二丁拳銃が月明かりで光っ

ている。
右手にはスライド部分が黒い拳銃と左手にはスライド部分が白い拳銃が握られていた。
特異なのはその拳銃の銃口が二つ付いている事だ。
狩猟用の上下二連ショットガンの拳銃版のようなところか？
黒い軽装の防弾チョッキは非常に動き易そうだ。
右目には青く光るヘッドアップディスプレイ（ＨＵＤ）が光っていた。
その格好は特殊部隊を彷彿とさせる。
しかし、闇夜で光るのは右目のＨＵＤだけではなかった。
紅い左目。
月夜に照らされて顔は判然としないが、その光りを受ける左目の瞳は紅く光っている。
悪魔や化け物と形容するに相応しいその瞳は真っ直ぐと男を見つめていた。
「逃げて下さい」
少年は女性を僅かに一瞥しながら言い放ち、紅く光る瞳で扉に行くように促す。
女性は涙を流し、這いながら廃工場から逃げて行く。
男は女性を追い掛けようとしたがその間に少年が割り込み、銃を交差させつつ、引き金を引いた。
銃のスライド音だけが響き渡り、銃の発射と同時に発生する発砲炎「マズルフラッシュ」も、銃声も、弾丸が音速に達する時の音「ソニックブーム」も無い。
男の体から血が噴き出し、次々に放たれる弾丸が男を吹き飛ばした。
少年は素早く銃の弾倉を交換する。
刹那、吹き飛ばされた男が人間では有り得ない跳躍力で飛び掛かってきた。
少年は素早い身のこなしでそれを避けたが男の目的は少年ではなく、女性だった。

逃げる女性に飛び掛かろうとしたその時、少年はワイヤーが巻き付けられた拳銃を構えて引き金を引く。
射出されたワイヤーの先端には銛のように尖ったフックがあり、ワイヤーはワイヤー同士、摩擦で擦れ合う音を鳴らし、男の足に絡まった。
「逃がすか！！」
少年はワイヤー付きの拳銃を引っ張ると男は女性に指一本届かず、後ろに引っ張られた。
凄まじい轟音とともに床が陥没し、コンクリートの破片が宙を舞う。
少年はワイヤーを巻き取ると再び煙の中に銃口を向ける。
（こちらスカイアイ、被害者の保護を完了。心置きなくやっちゃっていいぜぇ、狼さん！）
「ロメオ、了解した」
少年はヘッドセットから流れた無線に吹き込む。
刹那、男は土煙から飛び出し、少年に飛び掛かってきた。
咄嗟の事に反応出来なかった少年は男のタックルをまともに喰らい、宙を舞う。
同時に男は壁を蹴り、宙を舞っている少年まで跳び上がり、腹部に一撃を叩き込んだ。
凄まじい速度で落ちていった少年の体は地面に落下し、男同様に地面を陥没させた。
男は地面に降り立つと身動き一つしない少年に歩み寄る。
舌なめずりしながら歩み寄る様は先程の女性に対してのような下劣さは無いものの、やはり無気味だ。
男が少年を掴みあげようとしたその時、少年は目を開けて笑みを見せながら二丁拳銃を構えた。
「Ｓｐｒａｙ　ｗｉｔｈ　ｍａｃｈｉｎｅ　ｇｕｎ　ｆｉｒｅ！！
（機銃掃射だぜ！！）」
二丁拳銃の上下二連装の銃口から同時に四発の弾丸が、フルオート射撃で次々と男に吐き出されていく。

近距離で使われて拳銃は初めて真価を発揮する。
それを理解しているからこその不意打ちは非常に効果的だ。
拳銃弾で弾き飛ばされた男は穴だらけながらも生きていた。
拳銃弾を受けて生きている例は珍しく無いが、その多量の穴で生きていられるのは有り得ない。
少年は体を腹筋の反動で跳ね上げ、起き上がると同時に男も起き上がる。
拳銃で開けられた穴は塞がり、男は再び舌なめずりする。
「いい加減にくたばれよ、吸血鬼」
少年は舌打ちをしつつ、二丁拳銃の弾倉を交換した後、ホルスターに二丁拳銃を仕舞い、腰に差していた刃渡り３０ｃｍのナイフを鞘から引き抜いた。
少年はナイフを構えると左手で柄を逆手に持ち、柄の底に右手を沿え、切っ先を男に向ける。
月が雲の影に隠れ、周囲を消し去った。
紅い瞳がＨＵＤの明かりに照らされて明るく光る。
数秒して雲の中から月が現れて周囲を照らし出した。
同時に二人は駆け出し、重く鈍い音が響き渡る。
月の明かりに照らされた二人の影は重なり合いながら静止していた。
男の胸にはナイフの切っ先が刺さり、鮮やかな血を滴らせている。
二人の動きは止まったように動かない。
不意にナイフから青白い電光が男の体に流れ、肉が焦げた匂いが漂う。
数秒の後に電光は消えて、少年はナイフを引き抜き、男を蹴り倒した。
男は痙攣しながら地面に倒れ、地面を血で濡らす。
紅い絨毯は鉄臭い匂いを発しながら瞬く間に広がり、水溜まりを作った。
「こちらロメオ。任務完了だ。抹殺対象のヘクセは殺害した」
（了解。あ～あ、眠う……とっとと帰って来いよ？）

「分かってるよ」
少年は先程とは打って変わって柔らかな笑みを漏らすとＨＵＤとヘッドセットが一体になった装置に手を当てつつ入口に歩いて行く。
その時、男が拳を振り上げ少年に殴り掛かろうとする……
が、それより早く少年は二丁拳銃を構えながら振り返った。
「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ！！（大当り！！）」
吐き出された四発の弾丸は男の眉間を撃ち貫き、男を吹き飛ばす。
同時に男の体は溶けていき、コンクリートに溶け込んでいった……

# 1－1：潜入調査（前書き）

第1話

## １－１：潜入調査

吸血鬼……
誰もが一度は聞いた事はある単語だろう。
生命の根源と言われている血を吸う存在だ。
血を吸う存在などと笑う人もいるだろうが、実際、生物学的に利に適っている。
血液は高栄養の液体であり、ノミやシラミ、蚊等が良い例だろう。
その血を吸う人間は「ヘクセ」と呼称されている。
勿論、存在は極秘で知っているのは政府高官と一部の優秀な自衛官だけだ。
大々的に公表すればという意見も有るだろうがヘクセの特徴がそれを困難にしている。
一つ、ヘクセは人間と同じ姿で、目視で見分けが付かない。
結果、人々は疑心暗鬼に陥り、暴動に陥る可能性が出て来る。
一つ、ヘクセは特殊な能力や並外れた運動能力を持っている。
ヘクセはその通り、特殊能力、つまりは超自然的な力を操る事が出来たり、人間離れした身体能力を持っている。
前述の理由も加えると最悪の事態に陥ってしまう。
また、血を吸うという事はつまり、人間を必然的に襲うという事だ。
さらに民間に伝えられないという事実を考慮した場合、被害者は何が何だか分からない内に捕食・吸血されるという事になる。
被害者は行方不明にするにしても、あまりに多過ぎる被害者に政府は特殊部隊を設立した。
「Ｈｅｘｅ　Ａｎｎｉｈｉｌａｔｅ　Ｗｅａｐｏｎｓ　ａｎｄ　Ｋｉｌｌｅｒｓ」、通称「ＨＡＷＫ」は少数精鋭の特殊部隊だ。
階級は問わず、若く優秀な自衛官達を集めて設立されたＨＡＷＫは言ってしまえば不正規部隊だ。
自衛隊の英才教育を施した親がいない子供や天才的な自衛官だけを

集めたこの部隊には徽章を六つも持った化け物じみた自衛官さえいる始末。
どこの厨二病設定かと思うがそんな人物がいるのなら仕方ない。
そしてＨＡＷＫは、いや全世界の警察官や特殊部隊はある男を追っていた。
カズィクル・ベイ・ツェペシュ。
彼は謎が多いが、大胆でヘクセ史上主義を掲げる秘密結社「シュトレイゴイカバール」を率いている。
シュトレイゴイカバールは言ってしまえばテロ組織だ。
人間は勿論、同胞のヘクセですら殺す集団であり、世界から極秘に狙われている。
様々な名前で呼ばれ、報道されている殆どのテロ組織がシュトレイゴイカバールなのだ。
そんな組織がある市に潜伏したとの情報を手に入れたＨＡＷＫは政府の特命を受けて、その市に潜入調査を開始した……

華景市。
８００００人にも満たない人口の小さな市で４３０平方キロの面積のこの市に到着した一台の白いワゴン車。
「はい、御一行様、到着でございま～す」
口周りに無精髭を蓄え、体格はがっちりし、糸目の男性は柄にも無い声で運転席から出て来る。
１８１ｃｍの巨体に厳つい印象に、始めてみた人は熊を連想するだろうその人物はノリノリで小さな荘、つまり、木造のアパートをツアーガイドのように紹介していた。
今年３４歳の直江三村（なおえみつむら）三等陸佐、それにしてもこの男、ノリノリで

ある。
「おっちゃん、何かキモいわ」
金髪のセミロングを後ろで結び、青い瞳の整った顔立ちの少年は頭の後ろで両手を組みながら小声で呟いた。
その声に口を尖らせた三村は先程の少年に切り返す。
「うっせ！ほっとけ！」
三村は１７歳の日系ハーフの少年、ロイ・カブラギ陸士長を睨む。
「あらあらぁ～、相変わらずですねぇ、お二人さんはぁ～」
ロングヘアの流れる黒髪に垂れ目で大人びた顔立ちの女性はＤカップの胸の前で腕を組む。
微笑みを湛えるその２０歳の女性、比叡彩花（ひえい あやか）三等陸曹はいつもの光景を温かく見守る。
「はいはい、そこまでですよ」
黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちのボーイッシュな少女は手を叩きながら二人を諌める。
「全く、相変わらずなんだから！」
１９歳の少女、氷川優（ひかわ ゆう）一等陸士は腰に手を当てながら嘆息を漏らす。
「と、そういや幸成は？」
ロイは周囲を見渡しながら呟くと、助手席で爆睡している少年を見付け微かに笑う。
「寝てるよ……」
ロイは頭をポリポリと掻きながら助手席に向かって歩き、爆睡している少年の頭に一撃を叩き込んだ。
「っいった！」
少年は頭を押さえ、眠い目を開けながら、半ば憎らしそうにロイを見上げる。
その見上げた切れ長の目の片方、左の瞳は紅く染まっていた。
紺色のセミショートに整った顔立ちの少年は大きな欠伸を漏らすと助手席から降りた。
１７歳の直江幸成（なおえ ゆきなり）は六部屋ある荘を見て再び大きな欠伸を漏らす。

「着いたのか？」
「ああ。おっちゃん、説明をよろしく」
「おう！」
三村は咳ばらいをするとワゴン車の荷台からノートパソコンを取り出し、ディスプレイを指差す。
そこに映し出されていたのは華景市の航空写真だ。
「今回華景市に潜入したのは他でも無い。シュトレイゴイカバールの情報を掴んだ。自分達はそれを殲滅する。ここまではいつも通りだな？」
三村の声に全員が頷くと、画面が変わる。
「今回、シュトレイゴイカバールがある財閥と接触した形跡が見付かった」
「財閥ですかぁ～」
彩花は間延びした声で問い掛ける。
彩花が喋ると妙に気が抜けてしまうのはその口調か容姿か、判然としないがどちらにせよ和んでしまう。
「神宮寺財閥。華景市を拠点とする財閥で市の資金源とさえ言える財閥だ。生命工学に突出した財閥だけに、シュトレイゴイカバールがその財閥に接近したのは何故か調べる必要がある。自分達はそれを調べながら、ヘクセを狩る」
「潜入調査ですか？」
「簡単に言えばそういう事だ」
優の声に答えた三村はエンターキーを押すと画面が変わる。
映し出さたのはストレートヘアでセミロングのボブカット、可愛い顔立ちに赤縁の眼鏡の少女の写真が映し出された。
「神宮寺鳳寿（じんぐうじほうじゅ）、神宮寺財閥の御令嬢だ。現在、華景高校で一年生をやっている」
「成る程……ん？おっちゃん、さっき潜入とか言ったな？」
幸成は首を傾げながら苦笑いを浮かべると、三村はニヤニヤと笑って幸成の肩を数回叩いた。

「察しがいいじゃないか？流石、ＨＡＷＫでエージェントを担当しているだけあるな。お前には華景高校に潜入してもらう」
ＨＡＷＫの隊員は五人。
その役職は五つあり、それぞれエージェント、オペレーター、メディック、メカニック、トランスポーターとなっている。
それぞれその名前の通りの仕事である為、察して頂くという形で……
幸成はエージェント、ロイはオペレーター、彩花はメディック、優がメカニック、三村がトランスポーターを担当し、任務を行っている。
ここで話を戻そう。
「おっちゃん、それはおかしい！いや、確かに俺はエージェント担当だけど……俺、大学の過程修了してるし！」
「つべこべ言わない！お前は本来だったら高校生だ。学校を嫌がるとは引きこもりの前兆か？」
「いやいやいや！！」
「はいはいぃ～。まぁ、青春を楽しめるのですからぁいいじゃないですかぁ？ウチはそんな余裕は無かったですよぉ？」
彩花は幸成同様、大学の過程を修了し、医師免許を持っているが、高校での青春時代を送れなかった。
そんな人の言葉を無下に出来るはずもなかった。
「まぁ、彩花さんがそういうなら……」
幸成は嘆息を漏らしながら呟くとロイが「羨ましいね～」とほくそ笑む。
人の不幸でメシウマ、つまり「他人の不幸は蜜の味」という意味の笑いではないが、このロイの笑い顔、妙に腹立つ。
そんなロイに三村はこれこそメシウマという顔で言い放った。
「ロイ、お前もだ」
「俺もかよ！」
「当然だろう？エージェントの補佐をするのがオペレーターの役目だ。明日からは新学期。そこにお前達が転校というシナリオで二年

生に入ってもらう」
「ボクも一歳若ければ入れたのに」
優は頬を膨らませながらそっぽを向く。
何か、不安になってきたな、ホント……
幸成は空を見上げると苦笑いを浮かべたのだった……

## 登場人物：ＨＡＷＫ（前書き）

登場人物：ＨＡＷＫ

## 登場人物：ＨＡＷＫ

直江　幸成　（１７）

階級：陸士長

コードネーム

「ロメオ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」では現地に赴く「エージェント」を担当している。大学の教育過程を修了している。紺色のショートヘアで切れ長、左目が赤い瞳のオッドアイ、身長は１７２ｃｍ、整った顔立ち。性格は平時は真面目で礼儀正しい好青年、有事は仇成す者は皆殺しにする冷徹な性格。ヘクセ秘密結社「シュトレイゴイカバール」を追って華景高校に潜入調査をする事となる。

ロイ・カブラギ　（１７）

階級：陸士長

コードネーム

「スカイアイ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」ではエージェントを補佐する「オペレーター」。金髪

のセミロングを後ろで結んでいる。身長は１７４ｃｍ、青い瞳に整った顔立ちの日系ハーフ。女垂らしな性格で女性を見たら声をかけずにはいられないが、作戦時には真面目に幸成をサポートし、監視カメラをハッキングするなどしてサポートする。共に華景高校に潜入する。

比叡　彩花　（２０）

階級：三等陸曹

コードネーム

「アンビュランス」

一人称「ウチ」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」では治療を担当する「メディック」。垂れ目で大人びた顔立ち。身長は１６５ｃｍ。Ｄカップ。おっとりとした口調で喋る。１８歳で大学の卒業過程を終了しており、薬品の知識は医者と同等かそれ以上。

氷川　優　（１９）

階級：一等陸士

コードネーム
「アーキテクト」

一人称「ボク」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」ではエージェントの武器を作る「メカニック」を担当している。黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちの為、美少年に間違われるがボーイッシュな少女。Ａカップ。身長は１６８ｃｍ。可愛い物と銃が大好きと変わった趣味を持つ。意中の人には尽くす性格。家庭的で家事が得意。

直江　三村　（３４）

階級：三等陸佐

コードネーム
「フリューゲル」

一人称「自分」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「ＨＡＷＫ」所属の隊員。「ＨＡＷＫ」においてエージェントを輸送する「トランスポーター」を担当している。「ＨＡＷＫ」の中で最年長。口周りに無精髭を蓄えていて、体格はガッチリしており、目が細い。身長は１８１ｃｍ。面倒見がいい性格でノリがいい。部隊の仲間からは「おっちゃん」や「直江さん」と呼ばれている。

## １―２：登校

晴れ渡る青空。
雲の無い青空の薄い青は人の心を落ち着かせる。
その薄い青に輝く太陽は街を明るく照らしていた。
小さなこの市は中心街も人通りが少なく、車の通りも少ない。
田舎とも言えるこの市の中心街に幸成とロイが潜入を命じられた「華景高校」がある。
華景高校は生徒数が４５０人程度の学校だ。
華景高校から幸成達が暮らすアパート「雫荘」は徒歩２０分。
軽い運動には調度いい距離だ。
幸成は紺色のブレザーにネクタイ、淡い藍の鼠色がかった色「湊鼠」のズボンに身を包み、カバンを肩に担ぎながら空を見上げた。
「晴れてるな……」
思わず呟いた幸成は左目に触れた。
流石に紅い瞳は隠さなければと、彩花が気を利かせて買ってきたのが黒のカラーコンタクトだ。
実際、カラーコンタクトで瞳は隠れたが、カラーコンタクトは目にあまり良くないと聞く。
多少目に違和感があり、早く馴れなければと溜息を漏らす。
その時、幸成の横でロイの声が聞こえ、幸成は溜息を漏らして、ロイを見遣った。
単純に言おう。
ロイはナンパをしていたのだ。
ロイがナンパしていたのは墨を流したような美しい黒髪を肩まで伸ばし、左右前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている少女だ。
身長は１６２ｃｍ、二重瞼で目鼻が整い、唇も潤い、綺麗なピンク色をしている。
ＨＡＷＫの巨乳担当の彩花よりも大振りの胸が思わず目に入った幸

成は反射的に目を逸らしつつ、道の反対側にいるロイに歩み寄った。
「君って華景高校の生徒？何年生？」
「あの……えっと……」
返答に困っている、白く典型的なセーラー服を着た少女は怯えたように周囲を見渡している。
田舎だからナンパの経験が無いようだが、このプロポーションと容姿なら間違いなく東京等の都会でナンパかモデルスカウトに捕まりそうであった。
ロイが返答に困っている少女に、答えを待たずに次の質問をしようと口を開いたその時、幸成の拳がロイの頭に直撃する。
頭を押さえたロイが口を開くより早く、幸成は「すいません」と少女に一礼し、ロイの襟を掴んで足早に学校に向かって行った。
「何だったのかしら？」
少女はキョトンとしながら、ロイを引きずって行く幸成を見送った。
「サヤ～、おはよう」
サヤと呼ばれた少女は振り返ると、駆け寄ってくる小柄な少女に挨拶を返し、学校に歩いて行った……

先程の少女から離れた事を確認した幸成はロイの襟から手を離し、溜息混じりに呟いた。
「お前は何なんだ？」
「何なんだとは、何だ！」
幸成に毅然とした態度で返したロイはやたらと堂々としている。
本当に何なんだ、コイツは？
「仮にも潜入だ！！朝っぱらから堂々とナンパする奴が何処にいる！？」

「ハッハッハー！ここに居ますぜ」
ロイは悪びれずに自らを親指で差す。
……ダメだ、コイツ……
幸成は紺色の髪を掻き上げると面倒臭そうに、苛々しながら多少声を荒げ、ロイに言う。
「おっちゃんに目立つなって言われてるんだから少しは自重しろ！！ナンパは悪い事とは言わない……いや、悪い事だが……登校初日でアホな事をやらかすな、アホ！」
「……幸成、声大きい」
ロイの言葉にハッとした幸成は周囲を見渡す。
学生や通勤者の視線が幸成に集まり、周りの視線を独り占めとはまさにこの事だった。
幸成は声のボリュームを落とし、続ける。
「とにかく、だ。目立つな！」
「はいはい」
ナンパしてた時より目立ってたんだが、とツッコミたい衝動を喉の奥で飲み下したロイは頭の後ろで手を組んだ。
なんだかんだ、気が付いたら既に学校の前、二人は校門の中に入った。
華景高校は木造で、四階建ての学校だ。
木造と言っても、昭和をモデルにしたドラマで見るような風情がある学校ではなく、真新しい学校だ。
元々は古い学校だったが、神宮寺財閥が資金を出して、今の学校のような木の学校に新しく建て替えたという訳だ。
木の温かい雰囲気を醸し出す華景高校に入ると、木の心地の良い香りが二人を包み込む。
杉の柔らかく、温かい香りを二人は肺一杯吸い込むと、幸成は昇降口前の校内の案内地図を見る。
昇降口から右に曲がれば職員室、左は教室棟だ。
取り敢えず転校初日の挨拶にと、幸成とロイは上履きに履き換えて、

職員室に向かう。
「しかし、その監視対象者が一年生なら、一年生に編入させればいいだろうに……」
手を頭の後ろで組んだロイが呟くと、幸成がロイを一瞥して答える。
「いくら潜入調査って言っても、年齢的な外見はごまかせない。しかも、学費は払わなきゃいけないだろう？学費が二人合わせて二年分しか出なかったそうだ……」
流石、貧乏部隊と二人は同時に溜息を付いた。
ＨＡＷＫは民間に極秘で吸血鬼と戦っている少数精鋭の部隊、と聞けば最強と誉れ高い特殊部隊の「ＳＡＳ」や映画等でも有名な「デルタフォース」といった特殊部隊を思い浮かべる人も多いだろう。
しかし、ＨＡＷＫは吸血鬼（ヘクセ）という非日常を相手に、しかも極秘で戦うという理由で防衛費は少ししかもらえていない。
何故なら、政府高官や一部の自衛官しか知らないヘクセという存在に防衛費を多く出したら、それこそ金の流れを辿って最終的にＨＡＷＫにたどり着いてしまう。
貧乏とは言っても、最低限の弾薬の補給や武器の支給も行われているが、それもやはり最低限。
支給される弾薬は「９ｍｍパラベラム弾」と言われる威力が低い拳銃に使用する弾丸と、武器は米軍が使用する「Ｍ９」ことベレッタ社の拳銃「Ｍ９２ＦＳ」のエリートモデル「Ｍ９２ＦＳ－エリートＩＡ」が数丁。
極秘部隊なら映画で暗殺に用いられる「サプレッサー」という弾丸の発砲音を抑制する装備も使うと想像するだろうが、実際サプレッサーは消耗品であり、用いる事が出来ない。
その為、わざわざ部隊に武器を改造する整備士（メカニック）という職業が設けられているのだ。
そして今回の潜入の拠点も木造六部屋の小さなアパートという訳だ。
唯一、ヘクセは創作上の吸血鬼とは違い、心臓に杭を撃ち込む事をしたり、銀の弾丸でなければ倒せないという訳ではない事が救いだ

ろう。
それでも大量の弾丸が必要だが……
「「貧乏って辛いな……」」
二人は同時に呟くと、校長室の扉を開ける。
二人が挨拶をするより早く、学校長「佐藤正臣（さとう まさおみ）」は二人に笑顔を見せた。
「君達か、転校生は？」
「直江幸成です」
「ロイ・カブラギです」
「二人ともそう硬くならずに、気楽に構えて下さい。そこに掛けて下さい」
「「失礼します」」
二人は同時に答えると、黒いソファに腰掛け、佐藤も腰掛ける。
「君達には二年生のBクラスに入ってもらう。この学校の事で分からない事があったら、Bクラスの学級委員長に頼むといい」
「学級委員長？」
幸成が小さく呟くと、扉が開く音が聞こえ、優しげな声で入室の挨拶が聞こえてきた。
佐藤はゆっくりと立ち上がると声の主を見ながら「彼女が学級委員長の三神沙耶那（みかみ さやな）さんです」
二人がソファから立ち上がり、後ろの校長室の扉を見ると同時に素っ頓狂な声を漏らした。
狐につままれたような、所謂ポカンとした顔で少女を見る。
少女は、朝にロイがナンパしていた少女だ。
「貴方達は朝の……」
沙耶那は口を掌で隠し、驚いている。
第一印象は最悪だろう……
幸成は恨めしそうにロイを見るが、ロイは運命の出会いといった表情で喜んでいる。
誰のせいで胃が痛んでいると思ってんだ、このスタイリッシュ能天

気野郎？
幸成は軽く胃を押さえつつ、少女に会釈すると少女ーーー沙耶那は満面の笑みで返した。
「直江さん、カブラギさん、校長先生からお話は伺っております。ようこそ、華景高校へ」
沙耶那は天使のような温かい笑みで二人を迎え入れたのだった……

## 1―3：初日

職員室を出て、昇降口を通った三人は奇妙な雰囲気だった。
初対面という事も有るだろうが、それよりも最大の原因は朝のナンパだろう。
いくら三神沙耶那が学級委員長で、寛大な人物でも流石にナンパは……
幸成は深い嘆息を漏らすと、「三神さん」と沙耶那の名前を呼び、歩みを止めた。
「朝は本当にすいませんでした」
取り敢えず今は謝るしかない。
失礼をしたのはこっちなのだから……
「この馬鹿が失礼な事を……」
「馬鹿野郎！可愛い女の子を見たら声をかける。基本だろう」
何の基本だよ？
幸成は素早くロイの後頭部を押して、無理矢理謝らせた。
まるで犯罪を犯しても、悪びれない息子を謝らせる親の気分だ。
沙耶那は数回目をしばたたかせると笑みを見せた。
「朝の事は気にしないで下さい。ビックリはしましたけど、気にはしてませんから」
鈴の音のように済んだ笑い声をしてみせる。
つくづく良い人で良かったと思った幸成は顔を上げて笑みを返した。
「教育棟の三階が二年生の教室です」
沙耶那は階段を上がりながら続けた。
「二階は三年生、四階は一年生です」
「一階は何の教室ですか？」
「一階は補習の教室ですよ。テストで赤点を取ったらその教室で放課後、一ヶ月の間勉強をして、その後追テストを行って八割の点数を取ったら晴れて自由の身となります。とは言っても内容は難しく

なりますので、中々自由には成れないですが……お二人共、気をつけて下さいね？」
「だってさ、ロイ」
幸成はロイを肘で小突くと「俺！？」と素っ頓狂な声を漏らす。
大学を修了している幸成はともかく、高校を修了していないロイには少なからず関係のある話だろう。
その時、二人の様子を見ていた沙耶那は口に手を当てて笑った。
「お二人は仲が良いんですね？」
「まぁ、仕事の都合ですから……」
「仕事？」
幸成の「仕事」という単語に沙耶那は小首を傾げた。
やってしまったという後悔よりも先にごまかす言葉が幸成の口から飛び出す。
「はい。身内の仕事の都合です。俺とロイの身内の人、同じ仕事場で働いているので転勤したら毎回一緒の学校に転校になるんですよ」
少なくとも嘘は言っていない。
ＨＡＷＫのメンバーは身内同然だし、ヘクセを狩るという「仕事」には変わり無いからだ。
言葉とは少し変えれば真実にも偽りにも変わり、解釈の仕方でどのようにも捉えられる。
結局、言葉とはそういう物だ。
幼い時から話術を仕込まれた幸成には造作も無い。
「だからそんなに仲が良いんですね」
沙耶那はニコリと微笑み、階段を上り切る。
しかし、よく笑う人だと思い、幸成は沙耶那の後ろ姿を一瞥した。
揺れる黒髪が窓から漏れる光を浴びて光り、その美しい色を際立たせる。
モデルのようなプロポーションに見とれているうちに、教室の前にたどり着いた。
一クラス約３０人の男女共学の教室からは転校生が来るという事に

浮かれている為か、妙に騒がしい。
たいていの場合、男子は女子が、女子は男子が来たらテンションが上がるものだと聞く。
悪いな、二人とも男で……
幸成が自嘲的な笑みを見せると同時に沙耶那が教室の扉を開け、中に招き入れる。
二人は一礼しながら入室すると女子の黄色い声が響き渡り、幸成は思わず気圧された。
ロイはというと何故か英雄気取り（？）で手を振っている。
能天気でいいよな……
いや、俺が気負い過ぎ？
幸成は苦笑いを浮かべるとクラス全員を見渡す。
「自己紹介をお願いします」
沙耶那が二人を見ると、ロイから口を開いた。
「ロイ・カブラギ。よろしく頼むわ。ちなみに女性なら可愛ければ誰でもＯＫだ」
相変わらずだ……
とは言っても、こんな馬鹿が国の密命を受けた者だとは誰も思わないだろう。
「直江幸成です。早く馴染めるように努力します。よろしくお願いします」
同時に女子の黄色い声が教室中を揺るがし、幸成は苦笑した。
何なんだ、この空気は……！？

正午になり、雫荘で待機していた優が昼食のチャーハンを作っていると、挨拶に廻っていた三村と彩花が帰ってきた。

二人は同時に居間に大の字に倒れる。
雫荘の一部屋の広さは居間が8畳、お風呂、トイレ付きでキッチン完備、と聞けば良いだろうがやはり貧乏部隊。
かなり古い建物であり、ゴキブリは勿論、蛇や蜥蜴も入って来る始末。
しかも、元は幽霊屋敷と言われていた為、優とロイから猛反対された。
ちなみに彩花は大賛成であった……
結局、三村のごり押しと予算の都合でこの雫荘となったのだ。
「お疲れ様」
優はフライパンのチャーハンを三等分に皿に盛り、両手で器用に運び、中央のちゃぶ台に置いた。
「どうだった？」
優は蓮華をそれぞれのチャーハンに差しながら問い掛ける。
挨拶、というのは実際の所は建前であり、この街の噂を収集する為だ。
噂には都市伝説も含まれる。
つまりは口裂け女や人面犬等の話だ。
火の無い所からは煙りがたたないとは言ったものだが、実際はその通りである。
口裂け女も、紐解けば様々な事件が、まるで伝言ゲームのように口頭で語られるうちに変化していったのがよく分かる。
ましてやヘクセ自体が殆ど都市伝説のような物であり、噂として語られるならまさしく、口裂け女のように語られているだろう。
そう踏んだ三村は情報、つまり噂を収集していたのだ。
「収穫有り、だ」
三村はチャーハンの蓮華を掴むと一口食べてから続けた。
「最近、この街で変死体が多発しているらしい。血を吸われた死体が、な」
「ヘクセですねぇ」

彩花はのほほんと応えると、三村はチャーハンを掻き込む。
作った本人としてはしっかり味わって欲しいと思うだろうが、任務の話の時はさして気にしていなかった。
「学生達の間に流布していた『血吸い人』の話に酷似している」
「血吸い人？」
「夜、帰りを急いでいた女性が血吸い人に襲われて、血を吸われるという話だ。現代版吸血鬼伝説みたいな都市伝説だがそれが現代に蘇ったと住民達は噂している」
「噂って凄いですねぇ」
彩花はいつの間にかチャーハンを食べ終え、そしていつ煎れたか分からない紅茶を啜っている。
彩花って凄いと優は苦笑いを浮かべた。
「今回、シュトレイゴイカバールを相手にするという事情から、政府から偵察衛星を貰った。アメリカ軍のお下がりだから、旧式だが……」
やっぱり貧乏部隊……
が、偵察衛星を貰えただけ良しとしよう。
三村はチャーハンを食べ終えた皿に蓮華を置き、白いワイシャツの胸ポケットから煙草を取り出し、口にくわえた。
そして、煙草に火を点して、肺に紫煙を吸い込むと一気に吐き出し、小声で呟く。
「幸成、楽しくやってるかな？」
「心配なんですかぁ？」
彩花は新しい紅茶にミルクを入れて、スプーンで掻き混ぜると口に運ぶ。
飲む前に香りを味わうその姿は優雅で上品なお嬢様そのものだ。
「まぁな……あまり人と触れ合う事が無かったからな、幸成は……」
「レンジャー徽章乙、空挺徽章、格闘徽章、体力徽章、射撃徽章を保有でしたっけ、彼？」
「特殊作戦徽章もだ」

徽章（きしょう）とは優秀な自衛官に送られる、言わば勲章と思って貰えればいい。
それは様々な物があるが、陸上自衛隊は１５種類有り、そのうちの６種類を幸成が有している。
「幸成は小さな時から訓練を受けていたから、無理は無い。化け物じみた体力と回復力、そして瞬発力にあの瞳……自分だって、最初はヘクセを疑ったさ」
三村は眉間に皺を寄せながら煙草を吐き出す。
過去を思い出しているようなその顔には深い皺が刻まれていた。
「ヘクセのフェロモン反応は陰性の為、人間という結果が出た。しかし細胞活性速度は通常の二倍。まるでヘクセと戦う事を運命付けられ、この世に生を受けたとしか思えないんだよ、幸成は……」
「だから捨てられていたのかもしれませんねぇ」
彩花は小さく呟くと、紅茶のカップを置いて溜息をついた。
「だが、自分が幸成を拾った以上は最後まで育てるのは当然。そりゃ育ての親なら心配するだろう？」
三村は灰皿に煙草の灰を落とすと、優はチャーハンの器を片付け始めた。
「とにかく、大丈夫ですよ。イジメとかも対処出来そうですから」
「いや、自分が心配しているのはそこじゃない……幸成に彼女が出来るかだ」
「そこですか！？いや、初日に出来たら凄いですけど……出来ないでほしい……」優は聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと、彩花は口に手を当て、声音に笑いを含んで優に呟いた。
「頑張って下さいねぇ～」
優は動きを止めると、顔を引き攣らせた。
優の呟きが聞こえなかった三村はというと理解出来ずに、二人を交互に見遣る。
と、不意に三村は思い出したように口を開く。
「そういや、偵察衛星とパソコンとのリンクってどうやるんだ？」

「そういうのはロイ君の担当ですからぁ、ウチ達にはぁ分かりませんよぉ～？」
「仕方ない。あいつらが帰ってくるまで自由時間だ。偵察衛星が使えなきゃ、ヘクセを探すにも探せないからな」
三村はそう言うと、灰皿に煙草を押し付けた……

## １―４：昼休み

一方、三村達が昼食を取っていた頃、幸成とロイも昼休みとなっていた。
高校の休み時間は基本的に１０分だが、昼休みだけは昼食を食べる時間も含めて３０分の休みだ。
それぞれが思い思いの時間を過ごす昼休みは生徒達には憩いの時間に等しい。
その中で幸成とロイはそれぞれ購買で買った焼きそばパンとタマゴサラダのサンドイッチを手にしながら屋上に出た。
屋上は中央に数個ベンチがある簡素な所で落下防止用の金網が張ってある程度だ。
二人はベンチに座るとパンの袋を開ける。
食欲をそそる香りが二人の胃袋の虫を唸らせた。
「腹減ってたんだな」
幸成は小さく呟くと、焼きそばパンを咀嚼する。
「お前は良いよな、ホント」
「ロイ、どうした？」
「お前、女にチヤホヤされ過ぎだぜ？」
「そうなのか？」
幸成は素っ頓狂な声を漏らすと再び、パンを咀嚼した。
朴念仁（ぼくねんじん）、唐変木（とうへんぼく）を体現する幸成はと言うと、女子に黄色い声をあげられ、女子が周りを取り囲み、昼食に誘われるという男子なら憧れるであろうハーレム状態となっていた。
そしてそれを全て蹴るという愚行を犯した幸成は今に至る。
ロイはというと逆に女子からではなく男子に受けていた。
男子はお調子者や目立つ者を囃し立てる傾向が有るが、ロイはそれに当て嵌まり、一躍男子の人気者となったのだ。
最も彼にとっては不本意であり、幸成のような行為は恨み節の対象

になる。
「どうして幸成だけモテるんだ！？」
ロイの魂の叫びに幸成は冷静に突っ込んだ。
「その性分だろう？」
「マジで返されると返答に困るんだが……」
「顔は良いのだから、考えられるのはそれだけだろうからな」
「つまり、黙ってればイケメンって事か？」
「そういう事になるだろうな」
幸成はそう答えると紙パックの小さな牛乳にストローを差した。
「モテてる奴に本気で返された時の破壊力半端ねぇ！」
しかし、今日はよく喋る、と幸成は横で騒ぐロイを一瞥し、牛乳を吸う。
と、その時、屋上のドアが開き、見知った顔が現れた。
「あれ？先客がいた」
沙耶那は二人を見付けると微かに微笑む。
手には女の子らしい可愛い風呂敷に包まれた弁当箱がある。
そしてその沙耶那の後ろには別にもう一人、小柄な少女がいた。
薄い茶髪に右側のサイドテール、前髪は自然な感じで童顔な少女は、外見だけでは高校生とは分からず、小学生に見紛う程に小柄だ。
「サヤ～、この人達が転校生？」
「そうだよ、ナツ」
沙耶那はナツと呼んだ少女を一瞥すると二人に紹介する。
「こちらは私の友達の藤宮菜月（ふじみやなつき）ちゃん。Aクラスだからあまり交流ないだろうけど、仲良くしてあげてね」
「サヤ、子供扱いしないでよ！取り敢えずよろしくね」
菜月が笑い、その口元から八重歯が零れた。
その八重歯が彼女の幼さを強調している。
流石にこの幼女と言える少女にロイは手を出さないだろうと幸成はロイを一瞥した。
が、その考えは甘かったと打ちのめされる。

「俺はロイ・カブラギ。可愛い女の子なら誰でもいい！ストライクゾーンしかない男だ！」
「……つまりは変態さんって事だよね？」
菜月の一言はロイの熱い魂を木っ端みじんに粉砕するには十分であった。
アイデンティティをクラッシュされたロイは呆然と、真っ白に燃え尽きる。
そう、真っ白に……
「いつもここで昼食を食べてるんですか？」
「うん。そうだよ」
菜月は笑みを浮かべて頷くと向かいのベンチに腰を下ろした。
ベンチにギリギリ足が届く程度の身長の菜月は足をパタパタと動かす様子はどう頑張っても子供にしか見えない。
「女子は皆騒いでたよ？王子様が現れたってさ」
菜月は風呂敷を開けて弁当箱の蓋を開ける。
「王子様って俺か？」
ロイの一言に菜月は笑みを掻き消し、不穏な笑みで切り返す。
「変態さんな訳無いじゃん、馬鹿なの？」
この子、おっかねぇ……
幸成が苦笑いを浮かべると、沙耶那は弁当を口に運ぶ。
菜月はと言うと、幸成をまじまじと眺めている。
「カッコイイよねぇ？え～っと……」
「直江幸成です」
「ユキ君だね？芸能事務所に所属してたりする？」
「いや……」
「勿体ないよ、絶対売れるだろうに……」
「俺はそういうの興味ないから……」
「釣れないなぁ」
菜月は頬を膨らませると水筒の蓋をコップの代わりに、少し濁った水のような液体を注ぎ、口に運ぶ。

スポーツドリンクのような液体を口に運んだ菜月は一息つく。
「またそれ飲んでるの？」
「美味しいよ？サヤもどう？」
「私は遠慮するよ」
「その飲み物は？」
幸成の問い掛けに菜月は飲むかと目で問い掛けるが、幸成は「いい」と答える。
「そう言えば、夜に外に出ちゃ駄目だよ」
菜月は水筒に蓋を取り付けながら首傾げながら上目で幸成を見る。
「どういう事ですか？」
「最近、無差別殺人が起こってるんですよ」
「三神さん、無差別殺人とは一体？」
「沙耶那でいいですよ」
沙耶那は柔らかい笑みで答える。
幸成は咳ばらいをし、「分かりました、沙耶那さん」と訂正した。
「夜に歩いていた人が血を吸われるという事件です。現在、警察が捜査していますが危険な為、市民には夜間の外出禁止令が出ています」
成る程、政府の手回しが既に完了していたか……
「その犯人なんだけどね？運よく逃げ延びた人の話によると白い狐の御面を付けた、刀を持った白い着物の人なんだって」
「白い狐？」
「この市の伝承に白狐（びゃっこ）の伝説があって、鬼を退治して神様になったって話だよ。でも、その狐とは違うね」
菜月は笑い声を漏らすと、沙耶那は真面目な顔で切り返す。
「しかし、生き残った人が錯乱して犯人を見間違えたかもしれないですよ？」
「可能性としてはなくは無いが、そのような出で立ちをしているなら犯人と考えられなくはないですね」
幸成は牛乳パックを握り潰す。

白狐なんて今まで聞いた事がない。
刀を持っていると言っていたが、ヘクセにも武器を持っている者はいるが、御面は見たことがない。
シュトレイゴイカバールの儀式か何かか？
幸成が思考を巡らせていると同時にチャイムが鳴り響いた。
「……俺達はもう行くわ」
「分かりました」
「おい、行くぞ」
真っ白に燃え尽きたロイを無理矢理立たせると幸成は歩いて行く。
アイデンティティを完全破壊されたロイは力無く幸成に引っ張られて行った……

古い教会……
錆びた十字架と寂れたステンドグラスとイコン画。
そこには多数の老若男女が集まっていた。
中央の蝋燭が立てられた台座の前に立つのは若い男性だ。
男性は旗が括り付けられた槍を掲げている。
旗には紅い月をバックに髑髏(どくろ)があり、その髑髏に交差する鎌が描かれた悍ましい物だ。
「我々、シュトレイゴイカバールは計画の第一歩を歩き出す。今日が最初の一歩だ。この世の下等な人間は奴隷と食料に……そして我々、ヘクセが世界を築き上げる」
男の声に多くの者が歓喜の声をあげる。
「「下等な人間供に死を！！」」
彼らの輪唱が周囲を揺るがし、教会に谺する。
「人間は我々を化け物として扱ったが、二度の大戦を引き起こした

人間は我々以上の化け物だ。このままでは人類が滅びる。我々が愚かな人間に代わり、世界を支配する」
輪唱が結託の声に変わる。
古いプロパガンダのような演説を終えた男は片手を高く振り上げた。
「さぁ、ゲームの始まりだ！！」

## 設定（前書き）

１―４までの設定です

## 設定

ＨＡＷＫ

正式名：Ｈｅｘｅ　Ａｎｎｉｈｉｌａｔｅ　Ｗｅａｐｏｎｓ　ａｎｄ　Ｋｉｌｌｅｒｓ

吸血鬼を殲滅する為に作られた特殊部隊。管轄は陸上自衛隊。少数精鋭の為、隊員は５名。存在は民間には極秘とされている。資金の流れから足取りを掴ませない為に防衛費は少ししか貰えていない。

担当

・エージェント

現地に赴き、ヘクセの殲滅を担当する隊員。殲滅以外にも潜入調査やヘクセに捕まった人間の救助等もある。

・オペレーター

エージェントに無線で指示を出す隊員。レーダーや偵察衛星を用いてエージェントに指示を出したり、潜入調査の補佐を行う。

・メディック

エージェントの治療を行う隊員。身体的治療から精神的治療等を行う。また、エージェントを安心させる為に隊員は女性が選ばれる。

・メカニック

エージェントの使う武器や道具を作る隊員。エージェントやオペレーター等の使う武器や機器を作る事が主な任務。

・トランスポーター

エージェントを現地まで輸送する隊員。車の他にヘリコプターを操縦し、現地に向かう為、エージェントの次に危険な担当と言える。

ヘクセ

人間と同じ姿だが、化け物じみた身体能力や特殊な能力を扱う事が出来る人間の総称。所謂「吸血鬼」で人を襲い、血を吸う。「朝に活動出来ない」や「ニンニクの匂いに弱い」、「十字架や銀の弾丸を受ければ体が消滅する」、「心臓に杭を刺せば死ぬ」という事は無く、弾丸等で倒せる。しかし、生命力は当然のように高く、頭を撃ち抜いたり、心臓を串刺した程度では死なない。前述の特殊能力からドイツ語で「魔女」という名前が与えられている。

神宮寺財閥

神宮寺龍一郎が率いる財閥。薬品・生物産業に秀でている。ヘクセと何らかの繋がりがあると思われているが具体的な証拠がなく、財閥という理由で警察も手出し出来ないのが現状。

シュトレイゴイカバール

ヘクセ史上主義の秘密結社。創設者はカズィクル・Ｂ・ツェペシュ。目的は不明。エンブレムは紅い月に髑髏、それに重なる交差した鎌が特徴。人間を夜な夜な拉致して血を吸うという悪業を行っている。人間は勿論、裏切り者のヘクセですら問答無用で殺害する。

華景（はなかげ）市

某県にある市。市では行方不明事件（ヘクセに殺された）が多発している。人口約８００００人、面積は４３０平方キロ。

華景高校

華景市にある最も大きい木造の高校。男女共学。学力は平均レベル。全校４５０人の学校。運営しているのは神宮寺財閥。

雫荘

ＨＡＷＫメンバーが住んでいる木造のアパート。家主は直江三村という事になっている。部屋数は六つ。一部屋は空き部屋。

１０１号室
・直江三村宅

１０２号室
・比叡彩花宅

１０３号室
・会議室兼反省会会場

２０１号室
・直江幸成宅

２０２号室
・氷川優宅

２０３号室
・ロイ・カブラギ宅

血吸い人

帰宅を急ぐ少女が血吸い人に襲われて血を吸われたという都市伝説。

白狐

華景市に伝わる民間伝承。鬼を退治した白狐の話。白い狐の御面に白い着物の姿に刀を持った出で立ち。血吸い人から逃げ延びた人物の証言から明らかになった存在で不確定。また、ヘクセ、シュトレイゴイカバールとの関連性も不明。

## 1―5：放課後

ホームルームの終わりとともに高校の授業は終わった。
授業が終わり、帰れるという瞬間が高校生のみならず、全ての学生達には学校生活で最も幸せな瞬間ではないだろうか？
担任の話が終わり、挨拶を終えた幸成とロイはカバンを掴んだ。
言ってしまえば彼らにとってここからが仕事であり、学校生活はターゲットである「神宮寺鳳寿」と接触しなければ意味が無い。
しかも学年が違うから会う確率は有っても、会話する確率は圧倒的に低い為、下手をすれば三年生に突入し、さらに下手をすれば卒業で、潜入の意味が無くなる。
なら、こちらから声を掛ければと思うかもしれないが、いきなり訳の分からない人物が声をかけたならそれこそ目立つ。
自然に、かつ確実に探りを掛けるなら、最終的に効率がいいのは「何かきっかけを手に入れてから接触し、信頼を勝ち取る」という事になる。
つまり、運任せ……
エージェントが聞いて呆れるが、現状は仕方ない為、接触出来るまではヘクセを狩るしかない。
「さて、帰るか」
幸成はカバンを掴み、肩に担ぐとロイは「ああ」と答える。
菜月の「変態さん」の一言が相当効いたらしい。
（そりゃ、あれだけストレートに言われれば無理は無いな）
ロイには悪いが良い薬にはなっただろう。
「幸成君、ロイ君、一緒に帰りませんか？」
そう声をかけたのは沙耶那だ。
沙耶那は相変わらず優しげな笑みを湛えている。
どんな事をすれば怒りますか、と聞きたくなる程、笑顔が絶えない。
それに容姿も合わさって、完璧な美少女だ。

そんな沙耶那の後ろにはロイの天敵に成り得る可能性を秘めた菜月が隠れていた。
まるで姉妹のような構図に思わず幸成も頬を緩ませる。
「幸成君達のお家って、確か雫荘ですよね？」
「ええ」
「私の住んでる神社は雫荘の近くですから一緒に帰りましょう？」
「それなら是非」
幸成は笑みを見せると、不意に女子の目線が冷たくなった。
いつかの任務の時に、複数のヘクセに狙われた事があったのだが、その時感じた殺気に似ている。
（こ、ここは戦場か……？）
「行きましょうか？」
「そうですね」
幸成は居心地の悪い殺気に身震いをすると教室を出た……

イヤホンから洩れる音楽に合わせて鼻唄を唄う優は弾薬を作っていた。
正確には改造していた。
机には拳銃弾が分解されている。
彼女のモットーは「古い技術を転用し、最新の物に」であり、今もそのモットーでＨＡＷＫ専用弾薬をを作っていた。
ＨＡＷＫ専用弾薬「９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾」は通常の拳銃弾「９ｍｍパラベラム弾」を改造した優特製の弾薬だ。
ＨＡＷＫは貧乏部隊。
その特性上、消耗品である「サプレッサー」は使えないのが現実。
かと言って、隠密作戦を行う部隊が銃声を漏らす訳にもいなかい。

実際、銃声は「発射ガスの爆発音」だけではない。
自動拳銃を例に取ると、前述の爆発音に加えて、「スライドが動く機械音」と「発射された弾丸が音速に到達する時の衝撃音（ソニックブーム）」が有る。
スライドの機械音を消すにはスライドを手動にしなければならない為、ヘクセ相手の火力不足は否めず、それは出来ない。
しかし、衝撃音と爆発音は消そうと思えば消せると優が豪語し、作ったのが「９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾」だ。
一般的に爆発音を消すのはサプレッサー、衝撃音は火薬を減らした亜音速弾の役割だが、それを弾薬に搭載したのがこの弾薬である。
そこで優が参考にしたのは旧ソ連が開発した消音弾薬「ＳＰ－４弾」だ。
この弾薬は弾丸の下にピストンが有り、そのピストンを無色火薬で撃ち出し、ピストンが弾丸を撃ち出す。
その時にピストンが薬莢に蓋をし、発射ガスを閉じ込めて音を消すという代物だ。
それを９ｍｍパラベラム弾に仕込んだ物が９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾である。
無論、射程は落ちるがヘクセとの交戦は室内の、それも広くない空間が多い為、十分に通用する。
「よし、出来た！」
優はイヤホンを外し、音楽プレイヤーの電源を切ると作った弾薬を予め並べていた弾薬の列に並べた。
彼女はこの弾薬の他にも、古くなったコンピューターを再利用して様々な機器を作るといった事を成し得ている。
弾薬を一通り作り終えた優は背伸びをすると、弾薬を片付けながら時計を見た。
「もう４時過ぎたんだ。夕食を作らないと……」
夜間任務の為、夕食は早めに取り、胃を馴らすというのがＨＡＷＫの慣例である。
優はゆっくりと立ち上がると自分の部屋から出て、一階の空き部屋

―――作戦室兼集会場に向かって階段を下りた。
と、道路に幸成とロイが歩いて来るのが見え、優が帰宅の挨拶をしようとして言葉を止める。
幸成とロイの後ろに女の子が二人。
それもとびっきりの美少女だ。
不意に三村の「彼女」という単語がリピートされた。
「優さん、ただいま」
幸成の声に優は棒読みで挨拶を返し、美少女を見る。
「この女の子達は？」
「初めまして、三神沙耶那です。こちらは友達の藤宮菜月ちゃんです」
「初めまして」
沙耶那と菜月は優に一礼すると笑顔を見せた。
菜月は優をまじまじと見ると口を開く。
「ユキ君のお兄さん？」
「幸成の『お姉さん』の氷川優です」
優は引き攣った笑みを見せると、「家の幸成とはどういった関係で？」と繋げる。
（家のって、いつからあんたの実姉になった？）
幸成は苦笑いを浮かべると、沙耶那は動じず、笑顔で返した。
「私は幸成君のクラスの学級委員長で、二人がクラスに馴染めるように協力してあげています」
「そんな感じ。沙耶那さん、菜月さん、今日はありがとうございました」
幸成は一礼すると「どういたしまして」と返す。
これでは圧倒的に大人げないのが優で、大人の対応をしたのが沙耶那になってしまった。
「私達は今日はこれで失礼します」
沙耶那は一礼し、笑顔を見せると「また、明日」と付け足して歩いて行った。

その背中を幸成とロイが見送ると幸成は優を見る。
「優さん、さっきのはいくら何でも大人げないから」
「何で？」
「全体的に……」
幸成は溜息を漏らすと髪を掻きあげた。
この人は何故か女性絡みになると妙に大人げなくなる。
向きになるというか、美少女なら険悪なムードに成り兼ねない。
自分が女の子に見られないから気にしているのか、と幸成は聞いた事があるが、「歌劇団みたいでカッコイイじゃん」と返した為、それは違うという事が分かった。
しかし、その向きになる理由が分からない。
ロイや彩花、三村は知っているらしいが教えてくれないから尚更もどかしい。
幸成は深い嘆息を漏らす。
「優さん、夕食を作る為に下りてきたんじゃないですか？」
「そうだった」
優は思い出したように呟くと、空き部屋に駆け込む。
「本当に何だろ？」
「お前って本当に鈍いな」
「何？」
「何でもねぇよ」
ロイは呆れたように言い、部屋に向かって行く。
幸成は首を傾げると部屋に歩いて行った……

## 1―6：開戦

時計の針が１９時を指した頃、パソコンのキーボードを叩いていたロイが背伸びをした。
パソコンの画面には「リンク完了」の文字が踊り、ロイは三村を呼ぶ。
「おっちゃん、衛星とのリンク終わったぜ」
「おう！」
三村は答えるとコーヒーを啜りながら、提供された偵察衛星「ＧＡＲＵＤＡ（ガルーダ）」のリンク画面を見る。
「今回、よく偵察衛星を米軍が貸してくれたものだ」
「それほど、米軍もシュトレイゴイカバールを危険視しているのだろう。ルーマニアに潜伏していたカズィクルを捕らえようとアジトに踏み込んだタスクフォースが皆殺しにあったからな。どの部隊でもシュトレイゴイカバールを消してくれればいいんだろう？」
三村はコーヒーを一気に飲み干し、流し台で食器を洗っている優にマグカップを手渡した。
優はマグカップを洗いながら自慢げに口を開く。
「まぁ、ボクのフェロモンを視覚化する装置を米軍に提供したからって事もあるかもね」
その声に食後の紅茶を優雅に飲んでいた彩花が嘯く。
「でもぉ、ヘクセがフェロモンを使って仲間を認識するというのを突き止めたのはぁ、ウチなんですけどねぇ」
まさにその通りであった。
比叡彩花はヘクセ研究においての第一人者であり、ヘクセがフェロモンを使い、仲間を見分けると突き止めたのは紛れも無い彼女の御蔭だ。
「とにかく、これで俺達はヘクセを楽に見付ける事が出来る。願ったり叶ったりじゃねぇか？」

黒のカラーコンタクトを外し、紅い瞳を見せる幸成がロイのパソコンを覗き込む。
この紅い左の瞳は不気味な光を放つ。
ロイはそんな幸成を一瞥すると、エンターキーを押して衛星の映像を映し出す。
華景市の上空を映し出すその映像は鮮明とは言い難いが地上の人間をハッキリと捉えている。
「お下がりって言っても意外に使えるじゃないか」
幸成が感心すると、ロイは苦笑いを浮かべ、嘆息を漏らす。
「アメリカ軍の偵察衛星の解析力はこんなもんじゃねぇぞ？地面に置いたタバコの銘柄をも読み取れるからな」
「……完全に旧式だな」
幸成は頭を掻きながら、深い溜息をつき、近くにあった銀色のアタッシュケースを開けた。
アタッシュケースには四丁の拳銃とヘッドセット、刃渡り３０ｃｍのナイフが納められている。
それぞれの拳銃は二丁が銃口が二つ有るＭ９２ＦＳ－エリートＩＡ、もう一丁が銃口に銛のようなフックが取り付けられたＭ１９１１Ａ１、もう一丁がグロック２６だ。
それぞれが任務に必要不可欠な物であり、対ヘクセ用拳銃、フックショット、麻酔銃となっている。
「調整は終わっているよ」
「相変わらず良い仕事してるよ」
幸成は手を手ぬぐいで拭いている優の肩をポンと叩く。
三村はその様子を見ると、声高に叫んだ。
「さて、捜索と参りますか。スカイアイ、フェロモン探索」
スカイアイ（ロイ）は文字通り空からの目を用いる。
フェロモン探索とはヘクセの出すフェロモンを視覚化し、人間とヘクセを区別する映像だ。
熱探知「サーマルビジョン」にも似ているその青い画像は人間はオ

レンジ色に表示されるが、ヘクセは緑色に表示される。
さらにヘクセの通った後に残留したフェロモンも探知する事が出来る為、ヘクセが通った跡が一目瞭然となるという訳だ。
このサーマルビジョンならぬ「Ｈｅｘｅ　Ｓｅａｒｃｈ　Ｖｉｓｉｏｎ」、通称「ＨＳＶ」はヘクセを探す部隊には必要不可欠なものである。
ロイは上空から映し出されるＨＳＶを見ながら、驚嘆の声を漏らした。
「流石、夜間外出禁止令が出てるだけあるな。パトカーらしき車が沢山有る」
「ヘクセを狩るにもパトカーを避ける必要があるな……」
「そうですねぇ。警察にもヘクセは極秘ですからぁ、鉢合わせたら面倒ですものねぇ」
彩花は人事のように呟きながら紅茶を啜り、それを飲み干す。
「しかしぃ、奴らが動き出すとしたらぁ、今日ですよぉ？」
「彩花さん、その根拠は？」
幸成は優雅に紅茶を嗜んでいる彩花に問い掛ける。
「敵はこちらの存在にまだ気付いていませんよねぇ？と、言うことはですよぉ？人間の能力を凌駕しているヘクセが大胆不適になるのは必然ですよねぇ？」
「確かに噂に成る程だからそれは有りえる。だが、夜間外出禁止令が出てる以上、獲物は……」
三村が目を細めると、ロイが怒鳴った。
「ヘクセを確認！！警察官が襲われている！？」
彩花は新しい紅茶にミルクとガムシロップを入れると、軽く首を傾げ、笑みを湛えつつ紅茶を飲む。
「場所を指定しろ！！」
「ポイントＡ３エックスレイ、ここから約４キロの地点です！！」
ロイは華景市の地図と偵察衛星を照らし合わせながら怒鳴る。
「了解！！ロメオ、準備だ。自分は先に車を準備する。急げ！」

「分かった」
幸成のコードネームであるロメオを口にした三村は部屋から飛び出し、幸成も黒い夜型迷彩を着込み、次々とホルスターを装着していく。
両腿のレッグホルスターに銃口が二つ着いたスライドがそれぞれ白と黒の拳銃、通称「スコトス&フォース」を仕舞い、ヒップホルスターにフックショット「ドルヒボーレン」、脇に仕舞うショルダーホルスターには麻酔銃「ミューデトラウム」、腰にナイフを指し、最後にヘッドセットを右耳に取り付けた。
「さぁ、ミッションスタートだ」

## 装備：ＨＡＷＫ（前書き）

ＨＡＷＫの装備。

お粗末ながら使われた武器を解説。

クリス・スーパーＶ

反動を後ろではなく下に逃がす事で銃の跳ね上がりを軽くしたサブマシンガン。

Ｍ９０ｔｗｏ

「ベレッタ　Ｍ９２ＦＳ」の最新型。弾倉のバネをショート化する事により、装弾数を従来の１５発から１７発に増やした拳銃。

グロック　１７

強化プラスチックを用いる事で軽量化に成功した、映画にも度々登

場する有名な拳銃。

**装備：ＨＡＷＫ**

ＨＡＷＫ－ＥＹＥ

通称

「フューラー」

ヘッドセットに右目に掛かるヘッドアップディスプレイ（ＨＵＤ）を装着した戦略情報機器。ＨＵＤには敵対者の情報を映し出す。また、微妙な筋肉の動きから次の行動を予測してそこから予想される動きも投影される。さらに、フェロモンの視覚化、暗視機能、望遠機能が搭載されている。意味はドイツ語で「探知器」

Ｍ９２－ＨＡＷＫ　ＤＵＡＬ

装弾数：１８＋２

使用弾：９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾

愛称：スコトス＆フォース

対ヘクセ用主力火器。外観は「Ｍ９２ＦＳ－エリートＩＡ」だが性能は上位互換とも言える銃。装弾数は弾倉のバネをショート化するという「Ｍ９０ｔｗｏ」を参考にして、反動はサブマシンガン「クリス・スーパーＶ」と同様のスライダーで相殺する事で両手でも通常に扱えるように、さらに銃身長を伸ばし、競技用の拳銃並の高い命中率を誇る等の高性能を有している。また、グロック１７同様ポ

リマーで出来ている為、弾丸抜きで９００ｇと軽い。銃口は上下二連装となり、射撃と同時に二発の弾丸を発射し、対象に対して致命的な「流体性力学的ショック」を引き起こしやすい。また、マウントレールも搭載され、ＨＡＷＫ－ＥＹＥに連動する特殊なレーザーサイトも搭載している。フルオート射撃も可能で前述の反動相殺機構に加え、発射間隔を抑えており、操作しやすくしている。右手に黒い拳銃「スコトス」、左手に白い拳銃「フォース」を使う。スコトス＆フォースはギリシャ語で「闇と光」を意味する。

ＨＡＷＫ－ＮＡＩＬ

刃渡り：３５ｃｍ

通称

「メッサードルヒ」

ＨＡＷＫ正式採用のコンバットナイフ。長さから鉈や小太刀に近い。刺突や切り付けの両方に特化しており、刺突時には強力な電流を流す。ドイツ語で「短剣＋ダガー」を意味する。

ＨＡＷＫ－ＢＩＬＬ

ワイヤー：３０ｍ
限界重量：１２０ｋｇ

通称
「ドルヒボーレン」

小型のフックショット。先端が鋭利な銛のようになっており、紐は強靭で蜘蛛の糸を参考にし、少しの事では切れない。移動用や敵を引き寄せる等、用途は多様。ドイツ語で「貫通する」を意味する。

９ｍｍシャルデンプファー亜音速弾

９ｍｍパラベラム弾自体にＳＰ－４弾のようなガス密閉構造を設け、火薬を減らして亜音速弾にした物。射程距離は多少落ちるものの、高い消音効果を発揮し、その音は４５デシベル程度（電話機のベル）。サプレッサーが使えないＨＡＷＫで重宝されている。

ＧＡＲＵＤＡ

読みは「ガルーダ」。ＨＡＷＫが使用する軍事偵察衛星。アメリカ軍からのお下がりであり、旧式の物。カメラにはヘクセの発するフェロモンを視覚化する機能が搭載されている。

９ｍｍパラライズ弾

世界初の対人麻酔弾。弾頭は蚊の針を参考にした小さい針でそこから成分がサクシニルコリンに似た薬品を注入する。また、通常の弾薬より少ない火薬が特徴。刺さった標的は筋弛緩を引き起こし、体を麻痺させる。対人麻酔は薬品の量で死に至る為に使われていなかったが、致死量の直前になると成分が体内分解する薬品が使われている。

グロック２６－ＨＡＷＫ

装弾数：１０＋１
使用弾：９ｍｍパラライズ弾
愛称：ミューデトラウム

「グロック２６」のＨＡＷＫモデル。外観はグロック２６だが、使用弾薬は９ｍｍパラライズ弾を使用し、民間人の排除やヘクセの捕獲・保護に用いられる。サプレッサーを取り付けられ、ヒップホルスターに仕舞われる。愛称の「ミューデトラウム」はドイツ語で「眠い夢」を意味する。

アルムブレスト

装弾数：１
ワイヤー：７５ｍ
限界重量：１８０ｋｇ

クロスボウ。矢にワイヤーが取り付けられている。理由としては貧乏部隊であり、矢を無駄にしない為という理由とヘクセの足を止めるという理由。６倍率スコープが取り付けられ、逃げるヘクセに対して用いられる。基本的に車に積まれている。意味はドイツ語で「石弓」

## １―７：追撃

街灯のオレンジ色の光とパトカーの赤い光が周囲を照らす。
まだ日が短いこの地域の夜は早い。
この時間には闇に包まれる。
東京等とは違い、田舎であり、さらに夜間外出禁止令が出ている為、２０時に成らずともスーパーは閉まり、２４時間営業を売りにしているコンビニすらも閉まっていた。
市民は家の中に逃げ込み、本当の化け物――現に化け物ではあるのだが――に怯え、家の明かりは消えている。
まるで昭和の、第二次大戦中の空襲から避ける様子に似ていた。
警官達はパトロールを行い、「血吸い人」を警戒しているのは１９７９年に流布した有名な都市伝説「口裂け女」以来だろう。
「しかし、何もありませんね、金田さん」
若い警官は金田と呼んだ中年の警官に呟くと、助手席で背もたれに寄り掛かっていた金田がハハッと笑った。
「ったく、警官をこんな事で使わないで欲しいな。お前もそう思うだろ、木村」
「そうですね」
パトカーを運転していた木村が車を商店街の方に向けると、背中を向けた黒いローブの男が目の前にいた。
それに気付いた木村は慌ててブレーキを踏み、車を急停止させる。
金田は血相を変えて、助手席から飛び出し怒鳴った。
「おい、君！！旅行者か！？今は夜間外出禁止令が出ている」
男はこちらを振り向かない。
ただ、背を向けて遠くを眺めている。
「聞いているのか、君！？」
金田が男の肩を掴むと、腹に……
金田の腹に鋭い激痛が走った。

激痛というにはあまりにも複雑で、内臓を掻き乱されるというにはあまりにも安直で……
「……っぁ……っはかぁ……」
「痛い？痛いよね？内臓を刃物で掻き乱されて、骨を砕かれて……」
男は体を前屈みにして呻く金田の耳元に呟き、問い掛けると金田の腹から滝のように溢れてくる血を飲み込む。
「うわぁあああ！！」
木村は絶叫すると車をバックさせた。
彼の本能が逃げろと叫ぶ。
その本能に素直に従った木村はアクセルを踏み込み、商店街から遠ざかる。
あれが血吸い人？
だとしたら、自分も……
「死にたくない……死にたくない、死にたくない！死にたくない！！死ぬのは嫌だ！！」
木村は絶叫し、アクセルを踏みつづける。
スピードメーターは１００キロをゆうに超えていた。
赤信号を無視してでも逃げなければならない。
……しかし……
バックミラーには先程の男が映っていた。
１００キロを越えるパトカーに人間が着いて来れるはずはない。
だが……
パトカーの上に何かが乗る音が響き渡り、バックミラーから男が消えた。
「嘘だろ！？おい、嘘だ……」
屋根の上から刃が下り、木村の延髄から突き刺さったその刃が、木村の声を途中で途切れさせた。
１００キロを越えたパトカーは凄まじい勢いでスリップし、パトカーはガードレールに衝突し、停止する……

路上を走る黒いワゴンの電気自動車。
無音のそれは闇に紛れて、街を走る。
黒いワゴン車の中の助手席に座っていた幸成のＨＡＷＫ専用のヘッドセット「ＨＡＷＫ－ＥＹＥ　フューラー」からロイの声が聞こえてきた。
（こちらスカイアイ！新たに警官二人が殺害された。目標は近接戦に特化している模様、オーバー）
ヘクセの戦闘系統はそれぞれは三種類ある。
近距離特化型、遠距離戦特化型、特殊能力特化型の三種類だ。
ヘクセとは言っても武器を使う者もいる。
剣や槍、拳銃や突撃銃等を使うヘクセもいるのだ。
今回はロイの報告から近距離特化と言っているが、実際、特殊能力特化型かもしれない。
と、言うのも特殊能力特化型は超自然的な能力、例えば雷等を操るが、常にそれらを操る訳ではなく、何かしら武器を交えた戦闘を展開する。
つまり、警官を殺害する際に能力を使わなかった可能性も考えられる。
「こちらロメオ、了解した。敵との距離を教えてくれ、オーバー」
（次の角を左に曲がればすぐ見えるはずだ、オーバー）
「了解。何か有り次第、随時、敵の情報を入れてくれ、オーバー」
（分かった。スカイアイ、アウト）
ロイからの無線が切れると幸成は車の後部席に置いていたクロスボウを掴んだ。
クロスボウの矢にはワイヤーが括り付けられている。
どちらかと言えばクロスボウと言うには遠く、鯨の捕獲に使われる

ハープーンに近いそれはＨＡＷＫ隊員からは「アルムブレスト」と呼ばれていた。
アルムブレストはワイヤーで敵の動きを止めるばかりか、銃痕が付けられない屋外の戦闘に用いられる。
アルムブレストに６倍率スコープを取り付けると、ワゴン車の天窓から身を乗り出した。
「ｏｎｅ　ｓｈｏｔ　ｏｎｅ　ｋｉｌｌ」、一撃必殺を意味する狙（ス）撃手（ナイパー）の金言は、クロスボウにも当て嵌まる。
実際、クロスボウは１９７０年代、銃が高性能の消音装置を得るまで特殊部隊で使われていた。
貧乏部隊には持ってこいの武器だ。
「Ｉｔ'ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ！！（ショーの時間だぜ）」
幸成ほくそ笑むと右目に掛かるＨＵＤを「Ｈｅｘｅ　Ｓｅａｒｃｈ　Ｖｉｓｉｏｎ」、通称「ＨＳＶ」に切り替え、赤眼を閉じ、右目に集中する。
サーマルビジョンに似た風景がＨＵＤに映し出され、同時に車が角を曲がった。
パトカーの上に乗っている緑色に映し出される人間がＨＵＤに捉えられ、幸成は赤眼を開ける。
普通の光景とサーマルビジョンが合わさり、奇妙な風景になった。
例えるなら、昔の青と赤のフィルムが取り付けられた３Ｄ眼鏡をかけているのに似ている混ざり方だ。
左目でアルムブレストのスコープを覗き込み、ヘクセと思われる男を中心に捉える。
男の両手には、インドのマラータ族が使っていた、篭手の先から７０ｃｍ程の剣が伸びた防具「パタ」が握られていた。
幸成はゆっくりと引き金を絞ると、男に向かって矢を放つ。
矢が真っ直ぐと男に向かい、ワイヤーが擦れる音が響き渡る。
唯一、消音性を欠く要素がこのワイヤーだ。
が、しかし、矢を現場に残す訳にいかず、ましてや撃った矢をご丁

寧に回収していたらヘクセに逃げられるから仕方ない。
矢が男に当たる瞬間、男は矢に気付き、それを弾いた。
空中に弾かれた矢はワイヤーの限界の長さを越えてアルムブレストに巻き取られる。
男はこちらに睨むと、パトカーからパタを引き抜き、駆け出して行く。
幸成は巻き取られて戻ってきた矢を掴むと三村に叫ぶ。
「おっちゃん！！早くしろ！！」
「分かってるよ！」
三村はアクセルを踏み込み、男の後ろを追跡する。
幸成はＨＵＤを通常のモードである「Ｌｏｃｋ＆Ｌｏａｄ」に切り替えた。
このモードは「敵を捉える（Ｌｏｃｋ）」と、敵の筋肉の微妙な動きから次の動きを導き出し、「ＨＵＤに映し出す（Ｌｏａｄ）」というビジョンであり、通称「ＬＡＶ」と呼ばれている。
風を切って走る男をＨＵＤに捉えた幸成は再びアルムブレストの弦を引っ張り、そこに矢を装填した。
「おっちゃん、奴の後ろに張り付いてくれ」
「分かってる！」
三村が怒鳴るのを聞き、幸成はスコープを覗く。
手ブレと車の揺れ、さらに男の不規則かつ俊敏な動きはＨＵＤに映し出される予想された動きと一緒ではあるのだが、矢が直撃するまでの時間を考えれば間に合わない。
スナイパーライフルでもあればまだマシだったかもしれないと幸成は舌打ちをし、一射目で弾かれた事を憎む。
男が人間には有り得ない速度で街の角を曲がり、車もドリフトしながら曲がった。
タイヤから白煙が巻き上がる。
（こちらスカイアイ！ロメオ、聞こえるか？まずいぞ！！）
「どうした！？」

（次の角に警官がいる！！何とかして止めろ！）
「簡単に言うな！」
（方向を変えるだけでいい！）
「……分かった、やってみる。ロメオ、アウト」
幸成はアルムブレストからホルスターの拳銃型フックショット「ＨＡＷＫ－ＢＩＬＬ　ドルヒボーレン」に持ち替える。
次の角まで約１００ｍ……
「おっちゃん、奴の１０ｍまで近付いてくれ」
「分かった！」
三村はアクセルを一気に踏み込むと、男の後ろの手前、１５ｍまで近付いた。
もう少し……
残り５ｍ……４……３……２……１……
幸成はフックショット「ドルヒボーレン」を構えると、男の数メートル手前に撃ち込み、ワイヤーの巻き取りでそこに引っ張られる。
移動用のフックショットであるドルヒボーレンには自分を移動させる程の力をモーターに出させる「ハイパワー」と物を引き寄せる程度の力の「ノーマル」があり、この強靭で有名な蜘蛛の糸を参考に作られたワイヤーは幸成の体を支えるには充分だった。
刹那、空中を舞う幸成の目の端に何か白い物が映り、そちらの方を見た幸成は言葉を失う。
路地の建物と建物の隙間に、白い着物と太刀を持ち、白い狐の面を付けた人物が立っているのだ……
その一瞬の出来事がスローモーションのように思えた瞬間、幸成の時間が元に戻り、ワイヤーに引っ張られる。
幸成はすぐに集中すると、ワイヤーが巻き取りを終えて男のすぐ手前に幸成は立つ。
即座にナイフ「ＨＡＷＫ－ＮＡＩＬ　メッサードルヒ」を構えると、男は大型のスーパーの方を向くとその屋上に跳んだ。
その高さは約２５ｍ、ドルヒボーレンでギリギリ届く距離だ。

幸成はドルヒボーレンの銃口を屋上に向けると、ワイヤーを発射し、手摺りに巻き付け、ワイヤーに引っ張られる。
ワイヤーが巻き取られて、その長さが限界まで短くなるより早く幸成は手摺りを掴み、屋上に降り立った……

## １－８：赤眼の狼

対峙する二人。
まだ薄い月明かりで照らされる二人の姿は片方は人間に見えず、逆に片方は人間にしか見えない。
紅い瞳の少年と黒いローブの男はそれぞれの武器を手に持っていた。
少年は上下二連装の二丁拳銃と男はパタを持っている。
一陣の風が吹き、男のローブが脱げた。
男は痩せ型で目が細く、髪は無い。
パタを下に下ろした男は口を開いた
「君の名前を聞かせてもらおうか？」
幸成は無表情になりながら小さく「ロメオ」とだけ答えた。
「コードネームか？まぁ、いい。僕はディック・チャンバー。シュトレイゴイカバールのヘクセだ」
シュトレイゴイカバールのヘクセの文字を聞いた幸成は眉をピクリと動かす。
「今まではぐれヘクセを狩ってきたが、シュトレイゴイカバールのヘクセと対峙するのは初めてだ」
「そうか……なら、これが最初で最後だっ！！」
チャンバーはパタを両手に凄まじい速度で幸成に駆ける。
風を切る音が響き渡り、幸成はチャンバーの頭を飛び越えてそれを避けた。
「凄い身体能力だ」
チャンバーが笑うと、幸成はスコトス&フォースの引き金を引いた。
放たれる９ｍｍＳＤ弾をチャンバーが、まるで漫画かアニメにあるような動きで弾丸を自分から逸らしていく。
「あまい！！」
チャンバーは怒鳴ると、パタを交差させながら幸成に向かっていき、振り下ろす。

同時に金属の澄んだ音が響き渡り、幸成はナイフ「メッサードルヒ」でその二本を受け止めた。
飛び散る火花が二人の顔を照らす。
二つの手を添えたナイフで受け止めたパタの重圧は凄まじい。
「これは刺さると痛いよ？」
チャンバーはニヤリと笑い、片方のパタでナイフを押さえながら、もう片方を後ろに引く。
この後、刺突が来ると分かっているがナイフに添えている手を離し、片方で拳銃を使うにしても、ヘクセの力を片手で支えられるとは思わない。
幸成は舌打ちをすると顔面に突き出された刃を顔を横にして避ける。
鮮やかな血が幸成の頬とパタを濡らした。
幸成の血をパタから舐め取り、不気味な笑みを見せる。
今度は横に振りかぶり、パタが一閃された。
幸成はナイフから力を抜き、逆に押さえ付けられる事で横に一閃されたパタを避ける。
パタは幸成の髪の先を少し切り、それとは別に空を切った。
先程の押さえ付けられた反動を利用し、上手くかい潜った幸成は再び拳銃を構える。
微かな銃声と同時に放たれる弾丸はまたしてもチャンバーのパタで弾く……
「無駄だよ？無駄、無駄！！」
チャンバーは怒鳴ると、冷静な幸成に問い掛ける。
「君は何でそんなに冷静なの？今から死ぬのが分かっているからかな？」
「逆だ」
幸成は鼻で笑うと二丁拳銃の弾倉を交換し、銃を交差させる。
「どうやって？」
「お前は致命的な事に気付いていない」
「何が？」

チャンバーが問い掛けると幸成は弾丸を発射した。
三度、次々放たれる弾丸を弾いたチャンバーは腕に走る激痛に顔を歪める。
チャンバーの腕からは真紅の血液がパタの付け根から滴り落ちてきた。
「何だ！？何なんだ、一体！？」
「お前は馬鹿だな。その武器は戦場で落とす事は無いが、同時に離す事も出来ない。つまり、下手をすれば自分の腕を痛めるという事だ。そんな武器で弾丸を弾けば常識的にそうなるだろ？Ｒｅａｃｈ！！」
幸成は怒鳴ると、二丁拳銃を連射しながら距離を詰める。
チャンバーは無謀にも血の滴るパタで応戦するが、数発防ぎ切れず、体に弾丸が届く。
幸成が弾倉を交換すると同時にチャンバーはヤケクソに切り掛かるが、腕を痛め、速度が落ちたパタを避けるには容易で、ましてやＨＵＤの予測された動きの通りのチャンバーは遊ばれている状況だった。
「この下等な人間が！！」
「下等な人間にやられてるお前は何だ？」
幸成はほくそ笑むと二丁拳銃をチャンバーの体に押し付けた。
「Ｂｉｎｇｏ！！」
フルオートで吐き出された弾丸は一瞬でチャンバーの体を蜂の巣に変え、弾き飛ばされた。
弾かれたチャンバーに銃口を突き付ける幸成の姿は月光に照らされ、不気味な赤を醸し出している。
「化け物め……」
「吸血鬼に言われるとは心外だぜ」
幸成は右手で拳銃を構えながら、左手で先程、頬に付いた傷痕を擦る。
傷は既に塞がり、ただ、固まっていない血液が手を濡らしただけだ

った。
「ああ、確かに俺は化け物かもしれねぇな」
幸成は自嘲すると、幸成は「良いことを教えてやるよ」と呟く。
「古来、吸血鬼を滅ぼすには六つの方法がある」
そう言うと、幸成は左手の指を広げていく。
「一つ、遺体を火葬する。二つ、水に沈める。三つ、心臓を取り出す。四つ、心臓に杭を打ち込む。五つ、首を切り落とす……」
そこまで言うと、五つ目で開いた手を握った。
「六つ目は狼に襲わせる。名前を知りたがっていたな？俺は赤眼の狼。貴様ら吸血鬼は俺が全員喰らってやる！！」
幸成はその冷たく、残酷な赤い瞳で男を見下ろすと、ゆっくりと引き金を数回引いた。
静かな弾丸は男の頭を粉々に粉砕し、周囲に赤黒いミンチを撒き散らす。
同時に男は衣服や武器を残し、その男がこの世にいた全てを消し去った……

# 登場人物：華景高校（前書き）

登場人物：華景高校

## 登場人物：華景高校

三神　沙耶那　（１７）

一人称「私」。華景高校二年生。容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀の万能美少女。うなじが隠れる程のセミショートで、墨を流したような美しい黒髪、前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている。身長は１６２ｃｍ、二重瞼で目鼻が整い、唇もみずみずしい。Ｅカップとスタイルも良く完璧とも言える美少女。天然ボケだが、基本的に面倒見のいい女の子。三神神社に住んでいる。

藤宮　菜月　（１７）

一人称「ナツ」。華景高校二年生。薄い茶髪に右側のサイドテールに、前髪は自然な感じ、童顔で１４９ｃｍと背が低く、よく子供に間違われる。Ｂカップ。笑うと口から八重歯が覗く。明るい性格で子供っぽい。ロイとの仲は最悪。沙耶那とは「サヤ」と「ナツ」と呼び合う仲。趣味は園芸で花を育てる事が好き。毎日スポーツドリンクを飲んでいる。

神宮寺　鳳寿　（１６）

一人称「アタシ」。華景高校一年生。褐色のストレートヘアでセミロングのボブカットに右の前髪部分に髪留め、可愛い顔立ちで赤縁の眼鏡をかけている。Ｃカップ。身長は１５８ｃｍ。ＨＡＷＫの監視対象者。

# 2－1：二日目（前書き）

第2話

## 2―1：二日目

カーテンから零れ出る太陽の光が幸成の顔に触れる。
その優しい光が幸成の顔を照らし、幸成はゆっくりと目を開けた。
目を開けて初めて実感出来る、生きているという実感。
ヘクセという有り得ない存在と戦ってから朝を迎えると、いつもこの実感に苛まれる。
幸成は髪を掻き上げると布団から出て、洗面台に立つ。
夜に付いた、あの傷は跡が残らずに消えていた。
掠ったとは言っても、一日で消えるような浅い物ではない。
化け物……
チャンバーの言葉が頭の中で響き渡り、幸成は舌打ちをした。
皮肉にも化け物に言われるとはな……
自嘲した幸成は紅い瞳にコンタクトレンズを入れた。
この瞳が無くなれば、俺は……
「起きてるか～？」
朝から元気なロイの声が部屋に響き渡り、「ああ」と答えて顔を覗かせる。
「二日目だな……彼女出来るかな……」
「……諦めろ、お前には無理だ」
幸成がまさに諦めろといった風に肩を叩く。
「な、えっ！？何、その宣言！余命宣告？それとも死刑宣告なのか！？」
「冗談だよ、冗談」
幸成は呆然とするロイに笑いかけると、不意に昨日の夜のある出来事が甦った。
フックショット「ドルヒボーレン」のワイヤーで移動している時に見た、沙耶那と菜月から語られた「白狐」。
白い着物に太刀、白狐の御面の人物。

あれは？
「ロイ……」
「どうした？」
「……昨日、俺とおっちゃんが追跡している時に他にヘクセがいなかったか？」
「それは無い。あんな開けた所に別のヘクセがいたら、いくら素人でも気付くだろ？」
「いや、例えば路地裏とかは？」
「路地裏か……ただでさえ解析力が低いＧＡＲＵＤＡなのにＨＳＶじゃ、ますます探せねぇよ」
ロイの言う通りだった。
サーマルビジョンに酷似した視界では路地裏等を探すには難しい。青く染まり、さらに路地裏は深い青に染まったその視界から探すのは不可能という物だ。
「何があった、幸成？」
「信じねぇかもしれないが……白狐を見た」
「白狐って……冗談だろ？」
「俺だって冗談だと思うから聞いてんだ。伝承の存在が見えたんだから……」
「一応、録画はしているから後で確認だ」
「悪いな」
幸成は感謝すると、下から彩花の気の抜けた声が聞こえ、朝食だと告げた……

食後は何故か紅茶と決められたＨＡＷＫ隊員。
無論、決めたのは彩花だ。

実際、このメンバーで力関係図を構築した場合、彩花が頂点となる。
ＨＡＷＫ隊員の見解は一定しており、「彩花を怒らせたら毒を盛られそう」や「恐竜の絶滅の原因は実はこの人を怒らせたから」、さらには「人類が全滅する可能性はこの人を怒らせない限り皆無」とまで言われている人物だ。
五人はそれぞれ思い思いに紅茶を飲み、朝を満喫する。
「それにしてもぉ、いきなりシュトレイゴイカバール所属のヘクセを倒せるとは運が良かったですよねぇ」
彩花は薄紅色の紅茶の香りを楽しみながら微笑む。
その様子はやはりお嬢様にしか見えない。
あのような事を言われているとは思えない優雅な様子は、ギャップが有りすぎてこちらが困る。
「だが、何か誘っている感じがしたな……あそこまで大胆にシュトレイゴイカバールが動くとは思えないしなぁ」
三村はレモンティーを啜りながら呟くと、つくづくコーヒーが飲みたいと思う。
幸成もコーヒーに、ではなく先程の呟きに同意した。
「確かにそうだな。まだ、はぐれヘクセ供の方がしっかりと隠れていたからな」
「何らかの組織の意図を感じられるというか、そんな感じだよね？ボクは雑魚を囮にしてこちらの戦力を観察したって感じたな」
戦力の観察？
という事は白狐はシュトレイゴイカバールのヘクセか？
幸成が白狐を頭の中で反芻させていたその時、扉をノックする音が聞こえ思考を止めた。
「はい、今出ます」
三村はレモンティーを一気に飲み干すと扉に向かって歩き、ドアノブを回した。
ドアの向こうに立っていたのはセーラー服に身を包んだ可憐な美少女と小柄で可愛らしい少女だ。

「あれ？可愛らしいお嬢さん方だ」
その覚えのある声を聞いて幸成は三村の隙間から顔を覗かせる。
やはり、とでも言うべきだろうか？
沙耶那と菜月がドアの前に立っていた。
向こうもこちらに気付き、軽く会釈する。
「初めまして、三神沙耶那、こちらは友人の藤宮菜月です」
「こりゃまた、ご丁寧に……自分は幸成の保護者の直江三村。よろしく」
三村は頭に手を当てると頭を下げると、ニヤニヤしながら幸成を一瞥する。
「何だ、幸成？もう彼女が出来たのか？」
「違うよ」
幸成は即座に否定すると紅茶を飲み干し、立ち上がる。
「沙耶那さん、菜月さん。紅茶でも飲んでゆっくりしていって下さい。俺は今から歯を磨きますから」
「では、お言葉に甘えて休ませてもらいます」
「そうだね！モーニングティーって言うの？憧れてたんだよね」
「どちらかと言えばぁ、アフターディナーティーですねぇ。アーリーモーニングティーは朝食前の寝覚めのお茶、そして本当のモーニングティーのイレブンシスはぁ、その名の通り１１時前の飲みますぅ。初めましてぇ、比叡彩花ですぅ。二人の姉とでも思ってくださいねぇ～」
彩花はマグカップに二人の飲む紅茶を入れながら間の抜けた声で笑う。
相変わらずというべきか、手際がいい。
「ゆっくりしていってくださいねぇ～」
彩花はそう言って二人にお茶を差し出した……

## 2―2：学校へ

ブレザーに着替え終えた二人はそれぞれの部屋の鍵を閉めると雫荘の階段を下り、ＨＡＷＫ隊員の集会所として使われている「１０３号室」の扉を開けて挨拶をした。

「行ってくる」

幸成の声に三村は「行ってらっしゃい」と答えた。

傍目から見れば仲の良い住人達にしか見えない。

仕事仲間と伝えているからそれも違和感無いだろう。

四人が学校へ歩いていると沙耶那が口を開いた。

沙耶那からほのかにアールグレイの独特の心地の良い香りが漂い、幸成は頬を緩ませる。

「最初、幸成君のお父さん見た時ビックリしましたよ。幸成君達の声が聞こえるからノックしたら凄く大きな人が出て来たんですから」

「そうだね。でも、何か全然似てないね？幸成君ってお母さん似？」

返答に困る質問だ、と幸成は苦笑いを浮かべてしまう。

ＨＡＷＫ隊員の素性はそれぞれが殆ど知らない。

軽口をたたき合う二人でさえ、何故ＨＡＷＫに入ったのか分からないのだ。

「……俺には母親と過ごした記憶が無いんだ」

元々捨て子で施設にいたとは言えなかった幸成は自嘲しながら呟いた。

無論、二人は申し訳なさそうに表情を歪ませる。

それを見た幸成は「気にしなくていいから」と笑って見せる。

二人は分かったと笑みを見せるもやはり申し訳なさそうだという表情は変わらない。

「それよりさぁ」と切り出したのはロイだ。

こういう時には非常に役に立つ―――もっとも任務の時は今以上に役に立つのではあるのだが―――ロイは話の転換には最適な人物だ。

「ここってどんな祭りがあるんだ？」
大方、飛び出すのは女の子の話かと思っていた幸成は、肩透かしとでも言うべきか、僅かに感心する。
「華景市には二つの祭りが有ります。明日の三日間の連休にこの街で桜祭りという物が開かれます」
桜祭りと言っても、桜の木には芽しか生えていないが……
幸成は季節外れだと思ったのが聞こえたのか分からなかったが、沙耶那は笑みを浮かべながら続ける。
「桜祭りと言っても花見のような物ではなく、桜の花が咲く事を願う為の祭りです。昔の風習と言いますか、儀式のような物ですね。勿論、一日目は私の神社で舞が披露され、二日目からは露店が並びます」
「サヤの踊りって凄いんだよ？優雅って言うのかな？巫女装束着てさ！時代劇のお姫様か巫女さんがやるような踊りをサヤがやるんだよ」
「それは凄いな。明日が楽しみだよ」
幸成は沙耶那に笑いかけると、沙耶那は恥ずかしそうに顔を赤くした。
その可愛らしい様子に幸成は思わずときめく。
（何か、可愛いな……）
沙耶那はスタイルもいいし、アイドルのようで美少女というに相応しい。
そもそも、幸成は同年代の女性と触れ合った事がなく、恋という経験をしたことが無い。
それもあり、初めての感情に幸成は戸惑う。
「それでもう一つのお祭りというのが夏祭りです。これは盆踊りが行われ、露店並びます。これは街全体が一丸となりますのでとにかく面白いお祭りですよ」
沙耶那は優しく微笑むと幸成は空を見上げだ。
この街はこんなに良い街なのに……

古い教会に集まった６人の男女。
男女はそれぞれ机に向かい、話し合っていた。
会議の張り詰めた雰囲気や談笑といった空気ではなく、緊迫した空気だ。
「……やはり、ディック・チャンバーは死んだか」
「所詮、奴はこの程度だったのよ」
「御蔭で敵の戦力を知る事が出来ました」
「へっ！たかがガキが一人だろ！？俺が片付けてやろうか？」
「……焦る……駄目……」
「そうですわよ。私の放った『虫』も動いてますわ」
「チッ！」
男は舌打ちをし、机に足を乗せた。
「我々にはまだまだ時間がある。焦る事はないさ」
リーダー格の男は引き攣った不気味な笑みを見せる。
「それぞれの力を私は信用している。勝利をこの手に！」
男は教会に響く大きな声で怒鳴ると、それぞれが立ち上がった。
「全ては貴方の為に、ツェペシュ様！」
男女はリーダー格の男の名前を呼ぶと一礼したのだった……

## 2―3：接触

学校に着いた幸成達は昇降口の下駄箱に向かった。
それぞれの下駄箱は三年間使う下駄箱であり、変わる事はない。
幸成とロイは上履きを履くと、靴を入れる為に下駄箱を開けた。
「じゃ、行こう！」
菜月が子供のように無邪気な笑みを見せると沙耶那も笑みで答える。
靴を入れたロイが何故か固まっている幸成を見る。
「どうした、幸成？」
「……これなんだが……」
固まり、困惑する幸成は下駄箱から三枚の手紙を取り出し、ロイに見せた。
ハート形のシールで封をしているものやピンクの手紙、ルーズリーフを折り畳んでペンで装飾した手紙と様々だ。
「何だ……これは？不幸の手紙か？」
「貴様！モテやがって！！何なんだ！？」
「知らねぇよ！！」
騒いでいた幸成とロイに気付き、沙耶那と菜月が二人に駆け寄ってきた。
「どうしたの～？」
「コイツ、いきなりラブレターもらってやがる！畜生！！羨ましいぜ」
「変態さんには無縁だもんね～」
菜月は相変わらずのアイデンティティクラッシュ技術でロイを撃沈させる。
この子に一級アイデンティティ破壊師の称号を与えてあげたい。
幸成は苦笑いを浮かべると手っ取り早いルーズリーフを開き、読み上げた。
「いきなり手紙を書いてごめんなさい。私、直江先輩と手紙交換し

たいの……一年C組米山麗奈か……困るな、こういうの……」
「……お前、露骨に酷いな」
「は？」
「普通、そういうのはこっそり読む物だぞ？」
「そうなのか？それは可哀相な事をしたな……」
どちらかというと天然だが、犯した自分の非は認めるのが彼の良い所だ。
幸成はカバンにラブレターを仕舞うと深い溜息を漏らす。
正直、馴れない物だと幸成は自嘲を浮かべる。
「幸成、その返事はどうするんだ？」
「そうだな……」
幸成が考えようとしたその時、予鈴のチャイムが鳴り響いた。
「一先ず行きましょう？」
「そうですね」
沙耶那の声に幸成は答え、歩き出し、角を曲がったその時だった。
凄まじい勢いで弾かれ、幸成は地面に尻餅を着く。
いくら訓練をした彼でも咄嗟の衝撃に耐える術は無い。
幸成が顔を上げると倒れていた少女も顔を上げた。
ストレートヘアのセミロングの髪をボブカットにし、右の前髪の部分を髪留めで止めている。
また、少女の顔は愛らしく、赤縁の眼鏡がアクセントになり、非常に可愛い。
この子は……
「君は……」
「……」
少女は謝るでも無く、廊下を駆けて行った。
と、少女が倒れていた場所には学生証が落ちている。
幸成は埃の付いたズボンを払うと学生証を拾い、開いた。
やはり、とでも言うべきだろうか。
二日目にして早くも接触が出来たのは非常に運が良かったとも言え

るだろう。
１年Ｃ組、神宮寺鳳寿（じんぐうじ ほうじゅ）。
ＨＡＷＫの監視対象者である鳳寿と接触する機会が与えられた事は久しぶりに嬉しい事だとも言えた。
「危ないなぁ！！廊下は走っちゃいけないのに！！」
菜月は子供のように怒る。
本当に子供らしいその様子は非常に心和み、とても高校生とは思えない。
「何か急いでいたのでしょう？幸成君、大丈夫ですか？」
「はい。取り敢えず、一時限目が終わったら返しに行こうかと……」
「あれ？言いませんでしたか？今日は二年生全クラス合同で体力テストが行われるので昼休みまで暇は有りませんよ？」
言ってないですよ、沙耶那さん……
この人はしっかりしているようで、時折何処か抜けている。
そして、やはりタイミングが悪いのはお約束なのか？
タイミングが悪い以前に、お世辞にも運動神経があまり良くないロイはそれこそ死刑宣告を受けたようだった。
学生の方に経験が有る人がいるだろうが、シャトルランや反復横跳び等の体力を著しく使う競技は鬱だろう。
しかも新学期早々、ましてや午前中全てとなると、運動神経の悪いロイには絶望だ。
「腹痛くなってきた」
「急に何言ってんだ、ロイ？」
「授業が無いだけいいじゃないですか？」
沙耶那はのほほんと笑うと、ロイもいつも程ではないが嬉しそうな笑みを見せた。
「おい！お前達！もうすぐ本鈴が鳴るぞ！！教室に入れ」
職員室から歩いてきた職員が騒いでいた四人に注意をすると、本鈴が鳴り響く。
それを聞いた四人は慌てて教室に駆けて行った……

## ２―４：体力テスト

時計の針が１１時を周り、小腹を空かせ始める時間帯。
その時間帯は早弁をして空腹を満たす人が多いだろうが、今日の華景高校は違った。
学生達が空腹さえも忘れる出来事が起きていたのだ。学生達は体育館に集まり、一人の生徒に注目していた。
その一人の生徒は言うまでもない幸成だ。
幸成は華景高校で行われた体力テスト行った全ての種目の記録を大幅に塗り替え、その様子を見ようと生徒達が集まっていた。
元々自衛隊の訓練で体を鍛え、体力徽章を有する幸成にとって、この程度の事はハッキリ言って造作もない。
そして今は２０ｍシャトルランの最中だ。
２０ｍシャトルランは、２０ｍを特定の音楽が鳴り終わるまでにたどり着き、それを体力が続くまで繰り返す競技だ。
二回連続でミスをしたらその場で終了となり、さらに回数が増える事に音楽の速さが増す。
正直、体力の無い人物には厳しいであろう種目を幸成は涼しい顔で、１８０回近くまでやっていた。
そこまでいくと既にやっている人はいなく、体力自慢のバスケ部や野球部、陸上部らは幸成を何者だ、といった風に眺めながらも戦力に欲しいと思っている。
女子は容姿が完璧で他の男子がへたれ込む中、全く息を切らしていない幸成は注目の的だ。
１００回付近で撃沈したロイは長々と続く、幸成のシャトルランを眺めていた。
不意にロイの後ろから沙耶那と菜月
「ユキ君って、何かスポーツでもやってた？」
「いいや、何も？」

スポーツじゃなく、自衛隊やってます、彼。
「私も１６０回が限界なので尊敬します」
沙耶那は汗を拭きながら微笑む。
女子で、しかも１６０回って十分凄いんだがと１００回前後のロイは苦笑する。
ちなみに女子一位、総合二位の彼女も十分に化け物と言えた。
勿論、胸的な意味も含めてである。
彼女の大きな胸は体操服にはキツイ為、殊更胸を強調し、止めと言わんばかりに走る度に上下に揺れる胸の前に、男子はテント設営者と出血多量者多数という状況だった。
ちなみにロイは前者である……
ついでに言うと、大きなお友達は菜月のぶかぶかの体操服という緩ロリな格好に全滅したのだった……
２００回を越えた辺りで先生は時間の尺という物で終わってしまった。
同時に体育館には幸成を讃える拍手が鳴り響く。
「まだ行けるんだがな」と小さく呟いた幸成は流れ出る汗を拭き取った。
「余裕だな」
ロイは幸成にスポーツドリンクを投げて寄越し、幸成はそれを一気に飲み干す。
５００ｍｌのスポーツドリンクはあっという間に空のペットボトルに変わった。
「沢山飲むんだね。足りなかったら有るよ？」
菜月は水筒を差し出すが、幸成は首を振る。
他の大きなお友達は幸成に嫉妬の眼差しを見せ、他の女子も菜月が断られた事で各所でガッツポーズを見せた。
「幸成君は凄いです。まだ行けそうですね？」
「正直、まだ余裕です」
幸成は笑うと、最後の種目であるハンドボール投げが行われた……

「あ～、疲れたぁ！！」
ロイは屋上で青空を見上げて叫び、サンドイッチを口に運ぶ。
「疲れてるな、ロイ」
「お前は疲れなさ過ぎだ」
ロイは人差し指を幸成に突き付け、サンドイッチを食らう。
「そう言えば、忘れていたな」
幸成は胸ポケットから鳳寿の学生証を取り出した。
「返して来る」
「そうですね。持ち主の方も困っているかもしれませんからね」
沙耶那は弁当箱の蓋を閉めると、手ぬぐいで口を拭く。
「悪い、ロイ！ゴミを捨ててくれ！」
幸成は結んだパンの袋をロイに投げて、階段を駆け降りて行った。
その背中を見送った沙耶那と菜月は今までに見ない張り切りように、目を白黒させる。
「何であんなに張り切ってるのですか？」
「……さぁね」
ロイはいかにも知らないという口調で二人に呟くと、幸成の駆けて行った階段を一瞥した。
「幸成君は今朝の人が好みという事ですか？」
「それは違うと思うぜ、沙耶那さん」
「確かに変態さんみたいに誰彼構わずって、訳じゃなさそうだからね」
「うっせぇよ！！この小学生！」
「しょ……屈辱だ！！抗議をを申し立てるっ！！」
腕をちぎれんばかりに振る菜月はまさに小学生だった……

## 2―5：コンタクト

屋上を下りてすぐ、教室棟の四階である一年生の教室だ。
一年生は先程の幸成の体力テストの結果で持ち切りだった。
そこに幸成が来れば盛り上がりが最高潮に達するのは必然。
C組に向かう幸成に気付いた女子は教室から顔を出して黄色い声を上げる。
無論、幸成は何を騒いでいるのか分かっていない。
幸成は髪を掻き上げるとC組に入った。
言うまでもなく、とんでもない歓声が上がり、幸成は困惑した表情になる。
「直江先輩、あんたに話があるんじゃない？」という声が聞こえてきた。
本人に自覚有りか？
幸成は話が早いと小声で呟くと「ここに……」と切り出した。
「はい！！」
幸成が言うより早く手を上げたのは目的の人ではなく、今時のギャルといった感じの女性だ。
幸成は困ったように苦笑いを浮かべると「ここに鳳寿って人いるはずなんだが……」という声に周囲がざわつき、手を挙げた少女は笑みをゆっくりと消して手を下げていく。
「神宮寺ならそこに……」と人だかりを指差すと同時に人だかりが割れる。
その先にはこちらに見向きもせず、頬杖を付き、ただ外を眺めている鳳寿の姿があった。
鳳寿は世の中を悲観するような、或いは何かを諦めたような目で外を眺めている。
暗い影を落としている鳳寿に幸成は歩み寄ると学生証を差し出す。
「朝にぶつかったよね？その時に落としたよ。学年を調べる為に中

を見させてもらいました」
「……」
鳳寿は幸成を見向きもせずに外を眺めている。
苦笑いを浮かべた幸成は困ったように後ろ髪を掻くと机の上に学生証を乗せた。
「ここに置くからね」
「……ん……」
鳳寿は短く答える。
暗い、暗過ぎる……
幸成は困ったように監視対象者である鳳寿を見る。
幸成にとって監視対象者と親しくなる事が任務で有り、今回の接触はまたとない機会であった。
が、しかしこのような事態になるとは……
「じゃ、行くね」
接触失敗、と考えるに相応しい結果だろう。
が、不意に幸成はある事実を思い出した。
「そうそう。明日、祭りが開かれると聞いたんだけど、一緒に行かないかな?」
我ながら、ロイみたいに必死だ。
馴れない台詞を言った事で全身が粟立ち、軽く身震いする。
あの馬鹿はこれ以上の事をよくもまぁ、恥じらいも無く言えるものだと感心してしまう。
幸成が顔を引き攣らせていると窓を見ていた鳳寿がこちらを一瞥した。
すぐに窓に目を戻したが、小さな声で「……ん」とだけ答える。
「ありがとう」
祭りの存在を教えてくれた沙耶那への感謝の気持ちと今日の運の良さに感謝だ。
幸成は教室の出口に向かいながら、嬉しさを隠したその時、裾を掴まれ、幸成は歩みを止めた。

軽く一瞥すると、後ろには先程、手を挙げた少女がこちらを見上げている。
不安そうにこちらを見上げている少女は「手紙の返事は？」と問い掛けた。
「手紙？」
そこまできて、初めて幸成は貰った手紙の一人が1年C組だったことを思い出す。
確か米山麗奈とか言ったか？
「悪いが付き合うつもりは無いんだ。ゴメン」
あっさりと一言で返した幸成は我ながら酷いなと内心呟く。
しかし、少女の返答はある意味で幸成よりも残酷だった。
「は？私よりもあのブスを選ぶ訳？」
その一言に幸成は眉を潜める。
何様だ、コイツ……
人をブス呼ばわりするこの少女は、女性絡みに疎い幸成の目から見てもそれなりに可愛い部類には入るだろう。
だが、白黒ハッキリ付けるなら彼女よりも鳳寿の方が可愛いと、幸成は思った。
そもそも、本人を目の前にそういう心ない事を言う時点で人として問題外である。
「最低だな……」
幸成は小さく呟くと、思わずヘクセに向ける時のような冷酷な視線を向けた。
仮にコイツがヘクセだったら、幸成は問答無用で撃ち殺していただろう。
そこまでに、幸成はこの少女に殺意にも似た感情を抱いていた。
幸成はすぐに前を向くと教室を出て行く。
早足で三人が待つ屋上に向かう幸成のその後ろではヒステリックに喚き散らす少女の声が響き渡り、その一言に幸成は歩みを止めた。
ヒステリックだけだったら別段相手にするつもりは無いが、混じっ

て聞こえた一言が問題だったのだ。
「ブス！！放課後、いつもの場所に来いよ」
幸成は舌打ちしたその時、昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。
確実にヤバイ……
しかも俺の一言のせいで……
幸成は自分の任務を優先した軽率な行動を恨む。
拳を強く握り、引き返そうと後ろを振り返ったその時、ロイ達の姿が見えた。
「幸成、どうした？もう昼休み終わるぞ？」
「……ああ」
幸成は拳を緩めると足早に三人に駆けて行く。
「どうしたの、ユキ君。顔が引き攣ってるけど？」
菜月は幸成の顔を覗き込むと、首を傾げる。
いつもだったらこのような動作に頬を緩ませるが、今はそんな気になれない。
「幸成君、どうかしましたか？具合でも……」
「いや、大丈夫だよ。何とも無い」
幸成は笑みを作ると否定する。
責任は俺が取らなければならない。
幸成は緩めた拳をにぎりしめると自分の教室に歩いて行った……

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6280x/

赤眼の狼

2011年10月28日08時10分発行